
地味な女の子の勇者騒動

国見炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地味な女の子の勇者騒動

【Nコード】

N0236T

【作者名】

国見炯

【あらすじ】

学校でただ一人の普通？な女の子。

まわりは全員容姿端麗頭脳明晰家柄最高なチート集団。そんな中で勇者に選ばれた普通の女の子。

「…それって、結局私が地味だからだね？」平均で普通だから選ばれる勇者って微妙だなあ、とチート集団に囲まれながらあつさりと異世界の異変を解決する女の子の話です。【誤解召喚】は勇者騒動の続編になります。主人公以外の視点が混ざります。

私の人生といえば、ついでるのかついていないのか良く分からない。つまりは普通の人生だった。

学校の成績は中。可もなく不可もなく。

体育の授業も中。程よく中間。

友達も派手でもなく地味でもなく、平々凡々を絵に描いたような学校生活だと思う。そんな私の平々凡々な人生に翳りが見えたのは高校受験の日。

高校は余程の事がない限りは合格って場所を受験した。

滑り止めは無し。私立を滑り止めに受けるのはもったいないし、私の後に続く弟妹の存在もある。滑り止めを受けた所で、私立の高い入学金なんて払いたくないしね。

少し早めに家を出た。

荷物はばっちり。自己確認は三回。身内の確認も三回。朝もすっかり食べたし、お弁当も鞆の中。

ちなみに高校は徒歩圏内。

考えすぎると失敗するという事を経験上嫌っていう程分かった私は、晴れ晴れとした空を見ながらのんびりと歩いてた。

良い天気。

今日はきつと晴れそうだ。

そんな私の前を歩くのはおばあちゃん。日傘を差してのんびりと歩いてる。

「おはようございます！ 朝の散歩は気持ち良いですね」
につこにこと笑顔を作りながら声をかければ、おばあちゃんがゆ

つくりとした動作で顔を上げたんだけど…。

「大丈夫ですか!？」

顔面真っ青。

空が青いんじゃないかって、おばあちゃんの顔が青かった。
うぎゃー！

悲鳴をあげてもいいですか？

いやいや駄目でしょ。朝が早い所為か人通りは無い。

経費節減の為に私は携帯を持ってないからSOSも無理。

悲鳴をあげてる暇なんかない！

頑張れ私の筋肉！！

「捕まって下さい！！！」

私と然程体格の変わらないおばあちゃん。

おんぶして、ふんつと鼻をならして顔を上げる。

「すまないねえ」

息も絶え絶えの状態のおばあちゃんの声が聞こえる。

「大丈夫です！　すぐ人通りのある場所まで行くので、安心して下さい！！！」

ずるずると、おばあちゃんだけは引きずらないように顔を上げて前を見つめて重たい足を動かしていく。

頑張れ頑張れ私。

おばあちゃんを座らせて人を呼びに行くという、今の時点で一番現実的な事は私の頭にはなかった。

筋肉と体力を限界まで使い果たし、偶々自転車に乗って見回ってたお巡りさん呼び止めた私の気力は、そこで限界だった。

コテン、と間抜けな音をたてて頭からひっくり返った私。

受身も何も取らないと、人は頭が重いから落ちるんだ。と実感する間もなく、ゴンツツと痛そうな音が響いた。

さようなら私の意識。

さようなら私の受験。

うふふふ。

お布団暖かくて気持ちがいいなあ。

ゴロンゴロンといつまでも寝ていたいと思わせる、今まで体験した事のない心地よい布団。

「大丈夫かい？」

「んあ？」

そんな夢見心地状態で聞こえた声。

「おばあちゃん!!」

倒れる直前にお巡りさんに託したおばあちゃんの声に、私の意識は一気に覚醒しておばあちゃんを確かめる。

顔色は良し。

呂律も回ってない。

「良かったー」

本当に良かった。

へたへたと全身から力が抜けた私は、そのまま後ろへと倒れこむ。ぽすつと聞こえる音と布団に受け止められる私の身体。

「あたしは助かったけどね……あんたには申し訳ない事をしたよ」

「え？」

心底申し訳ないといったおばあちゃんの表情と声。

「あー……」

そういえば。

そういえば受験だったよねー。滑り止め無しの本命一発挑戦。

「来年があるから大丈夫です！」

しかーし、ここは前向きに行ってみよう。もしくは二次募集。本命より遠くなつてレベルは落とすけど仕方ない。

そんな私に、おばあちゃんは真面目な顔で私の両手を握ってくる。
「んん？」

「あんたが良ければ、あたしの経営する学校の入らないかい？
勿論あんたは命の恩人だ。色々と考慮させてもらうからさ」

「ありがとうございますっ！」

考える間もなく頭を下げた。

こんな有り難い話はない。

「おばあちゃんお世話になります！」

けれど、もう少し冷静に考えていればと心底思う。

平均的な私。

十数年間それで過ごしてきた私は、平凡に慣れきって平凡のまま
行くんだろって思ってた。

この時、冷静に考えていなかったばかりに今に続いたんだろうと
思えば後悔しかないかもしれない。

「あらら。遼ちゃん^{ハルカ}どうしたの？」

窓際の一番後ろを陣取る私の元には、絶えず誰かが訪れる。

「別に：ちよつと眠たいなあって思いました」

「あら。そんな遼ちゃんに飴をあげるわね」

人気者とかじゃない。

別に苛められてるわけでもない。

「はい、お口あぐんして？」

1学年1クラスのみ。

ぶつとんだ仲の良いチート集団が集まる為だけに、建設され認可
された学校。絶対認可の裏には取引があったであろう普通は何処い
ったと思う生活風景。

男子の平均身長は180。

女子の平均身長は165。

男女共に容姿端麗頭脳明晰家柄最高。

世間一般でいうチートだ。

このクラスのチート集団は25人。学校全体で80人。

ちなみに学生は81人。

つまり、チートじゃない一般人の私を合わせて81人という事になる。

チート80人と一般人（並）1人。

勉強をやらせても普通。運動をやらせても普通。容姿も特筆すべき所はなく普通。そんな普通の私が貴重で珍しいらしく、何故か愛玩物扱いをされているような気がしなくもない。

これだけ劣る私に対して、本当に虐めは無い。

仲の良すぎる繋がりが同じ学校に通いたいね！をコンセプトに作られた学校だけに、普通の学校みたいな渦巻くドロドロは驚くほど無いのだ。

寧ろ他人と自分を比べる必要の無い方々。

出来ない私を不思議そうに見てたけど、とある日に私の横を通りかかったお嬢様が私に飴をあげた事で事態は一転した。

そこに美味しそうな飴があつたんだもん。

良い匂いだつたんだもん。

「おいひい」

貰った飴をフゴフゴと頬張る私をじいつと見ているお嬢様。

「そんなに美味しいの〜？」

「うん！ すっごくすごく美味しいです。ありがとうございます！」

こんな高級な飴初めて食べた感動をそのままにお礼を言えば、お嬢様が今度はチョコをくれた。

人差し指と親指で挟んで私の口元に近づけるから、思わずぱくつと食べてモゴモゴと頬張ってまた頭を下げる。

「おいひいです」

にへらつと間抜け面を晒す私。

美味しいものは幸せになれるのです。

その件をきっかけに、何故か学校全体の愛玩認定を受けた気がするのはいきつと、気のせいじゃないはずだ。

まあ…せめてもの救いは自宅通いが出来た事かな！

一般庶民の感覚から離れまくってる学校に馴染むと、今後危ないからね。

今日も今日とて派手な学校に通う。

入学から一年。この学校にも随分と慣れた気がしないでもない。新入生も入ってきたし。今年は少なめで20人だったんだけど、見事に全員チートだ。これが全部仲良しチート集団っていうんだから、人脈がどうなってるのか心底不思議だ。

「遼ちゃんおはよう」

「遼さんおはようございます」

「はるちゃん元気？」

「今日も小さいね」

「飴食うか？」

突っ立ってたらどんどん声をかけられた。

薄手のパーカーの中には何故か個別包装の飴やチョコやらが入っててく。

このままだと個別包装のお菓子で動けなくなる。うん。教室に避難しよう。別に教室も避難できるような場所ではないんだけど、学校全体の人間が通る通路よりはまじだと、パーカーからお菓子が落ちないように気をつけながら歩いてく。

「おー。あれがうちのハムスター先輩か」

「あんなちっこいのに、よくあんなに入るよなあ」

そんな会話が後ろでされているなんて知らず。

私はいつものように教室のドアに手をかけた。

「おはよー」

ってあれ？

何か今日は視界がぼやけてるなあ。

いつもこれでもかかって見える美麗集團の顔がぼやけてる。珍しいなあ、なんて思ってたなら、ゴンツと音と共に星が弾けた。

キラキラと輝く星。

私の周りを回ってる。

小さな声。

ささやくような声。

その中には慣れ親しんだ声も聞こえて、私はゆっくりと目を開けた。

「おおう。相変わらずの美麗集団…」

どうやら私は教室の入り口で昏倒という真似をやったのけたらしい。受験前にやったねー。後頭部ゴン。アレは痛かったけどこれも痛い、ぶつくりと膨らんだ後頭部をさすりながら私は辺りを見回した。

「はるちゃん大丈夫？」

「大丈夫ー。身体は丈夫だから」

私の顔を覗き込むのは、うちのクラスの委員長。チート力は中堅所。けれどクラスを纏められるある意味一番のとんでもないチート力を発揮出来る、茶色の髪がやつこそうなイケメンだ。

黒い縁の眼鏡はアイテムだろうと突っ込んだ事があるけど、当た

り前だろ。俺に似合うし、とにつこり笑顔で返したツワモノなのだ。

「あはは。それは知ってるよー」

「なら聞くな！」

このちゃらんぼらんな見た目の委員長が私の頬をつんと人差し指で突くから、反射的にかぱーんと噛み付こうとしたら逃げられた。

「俺の指はチヨコじゃないからね。はい、あーん」

「恥ずいわ！」

どいつもこいつもあーん、をデフォルメにするんじゃない！！

怒りのまま身体を起き上がらせただけだ。

「……あれ？ 机は何処いった？？」

辺りをキョロキョロと見回してみれば、真っ白な空間。柱も天井も何もかもが真っ白。白以外の色が付いてるのは人間だけ。

「ほへー。ここ何処？」

「私が聞きたいですわね」

私の疑問に答えてくれたのは副委員長。一番初めに私にお菓子をくれた女の子だ。

副委員長ですらわからないとな。

なら私にわかるはずないかあ。うん。おやつ食べよつと。

パーカーに入れてもらったおやつが散らばらなくて良かったと、もごもごと次から次へと食べてく。燃費が悪いんだよね！。

「大物だねえ。ハルちゃんてば」

「そりゃ頼もしい人たちに囲まれてますから」

25人のチートがいれば怖いものなんてないですよ。

虎の威を借りちゃう狐ですよ。今更今更。しかも皆私が背中にぶら下がってたぐらいじゃ気にしないし。

委員長と副委員長に両脇を固められながら、私は遠慮なく辺りをじつくりと確認していく。さっきまでは教室にいたはずなのに、今は何故か見知らぬ空間。

あれだね。

小説なんかでよくある、勇者召喚とかそんなノリだよな。
しかしうちの勇者は25人。学年全部で倍以上。一体何処の大魔王を倒してほしいんだろうね。瞬殺だよ？
かなり魔王に同情しちゃうね。

「はるちゃんは機嫌がいいねー」

「あら可愛いですねー」

「当事者たちが何言ってるの」

まったく。肩を竦めてみれば、委員長と副委員長は揃って一箇所を見つめてた。

んん？ なんだろな。

私も右に倣えで見たんだけど、そこにあつたのは黒い穴。ぽっかりと開いているんだけどいつの間にか開いたんだろ。

さっきまで何もなかったよねー。

景色が真っ白だから、異様な程黒が目立つ。

「あれ…」

ぼそり、と漏れた私の声は、そこからわいたようなロープの集団の存在感に飲まれ、誰にも聞かれる事なく空気へと溶けていく。

うおー。お約束なノリ。

よし、折角だから見学しておこう。

副委員長を前面に押し出すのは可哀想だから、ここは委員長の背を押してね。

「…はるちゃん。押してない？」

「壁にしているだけー」

つつこみが入ったけど気にしない気にしない。

そんな事でへこたれたらこの学校でやってけないもん。

委員長はつつこみながらも、どうやら壁になってくれるらしい。

「リヨウ。俺の後ろにいればいい」

だけど何故かここで緑化委員がきた。短く切った黒い髪をたてて、シャツを着崩してるちよつと不真面目な印象を受けるけれども、こよなく動物と緑を愛する青年だ。

スポーツマンな感じに見えなくも無いけど、無口さが他者に威圧感を与えるらしい。この辺りの調査は周辺を通る人たちの意見だ。

同じ学校で怖がる人間なんかいるはずがない。

ちなみに、彼は私をリヨウと呼ぶ。ハル力なんだけど、どうやらリヨウって呼び方が気に入ったらしい。

その辺りの理由としては、自宅にリーくんというハムスターを飼ってるからだそうだ。

んん？　どういう意味だと胸倉を掴んで問い詰めたいが、こんな身長187cmの強面兄ちゃんにそんな恐ろしい真似が出来るはずがない。

そうそう、私は一般人。

あくまで埋没するが宿命の平均人間なのだ。

「委員長を盾にしてるから大丈夫ー。緑化委員はいざって時のセカンド盾になってくれればいいから！」

まー。委員長な盾で十分効果があると思うけどね。

緑化委員は、委員長よりはチート力は上らしい。特筆すべきは運動能力：じゃなくて、彼の愛する自然に対する知識と四次元ポケットだ。

ある日私が外で不良さんに絡まれた時、緑化委員が偶々その現場に居合わせて――何処から取り出したのか、急須の先を不良の口に突っ込んで何かを飲ませてた。

一体彼が何をしたかったのか。

後日聞いた所によると、一週間程の記憶を失って真面目になった不良がいたとか何とか。

つっこまないけどね。

怖いから見て見ぬふりをしたけどね！

「はるちゃんって怖いもの知らずだよー」

ええい何を言うんだ委員長。

「皆がいるから怖くないんだよー」

まったく、チート集団のくせに無自覚って怖いね！

白いローブ集団は全部で10人。ローブを深々と被っているから年齢性別等は一切わからない。その集団がそろそろと入ってきたと思ったら、中心にいた人が大きな宝石の埋まった杖みたいなものを天井へと翳した。

ひよつとして勇者選定だろうか。

25人もチートがいるけど、一体誰になるんだろう。

ドキドキワクワクと興味を隠せずに見てたら、宝石から放たれた光が室内にいる人間全員を照らし始める。

「すごいねー。異世界の選定って本当にあるんだ」

興奮のあまりギュッと委員長シャツを握り締める。

「俺を睨んでも仕方ないから。わかってるー？」

「……仕方ない。リヨウが掴んでるのはお前のシャツだ」

「あらら」。遼さんが可愛いのはわかるけど、まったく聞いてないわよ？」

「……………」

前と横と後ろの私よりも大きな集団がそんな会話をしてるんだけど、私は緑化委員のペットになったつもりはないからね。ハムスターのリーくんじゃないから。

どうやらハムスターのリーくんは、何かあると緑化委員君を見上げて助けを求めるらしい。それを私に求められても困るからね。

本当に困るからね？

けれど今は予先が委員長に向かってるから、まあ……いっか。

そんな会話がされてる間も、くると杖から放たれる光が部屋中をまわってるんだけど、段々と光が細くなりスピードもゆっくりとなってくる。

しかし、見事にクラス全員が召喚されたんだねー。

見慣れた人物たちだけど、見慣れない場所にいるとちょっと新鮮だよなって改めて思う。

光は誰に止まるかな。

委員長かな。副委員長かな。それともうちのチート力No.1のお祭り部員かな。定番でいけばチート力No.1だよな。でも全員を纏められる、ある意味規格外なチャラ委員長も捨てがたい。

「あれ？ 今俺って結構な事言われた気がしたんだけど、はるちゃんどう思う？」

「ボケるにはちょっと早いんじゃない？」

声に出すわけじゃないのに、時々というか日常的にこんな会話があったりする。ナチュラルに人の心を読むからかなり困るよね。気にならなくなったけど。

ぐるんぐるんと室内を照らしまくっていた光だけど、その光のスピードがものすごく遅くなる。私の三メートル横ぐらいの子に当たり、そこから最終段階とばかりにゆっくりと近付いてくる。んん。

お祭り部員は反対側。

つまりこの流れは委員長か副委員長か！

ゆっくりゆっくりとチヨロチヨロと迫り来る白い光。

この光のスポットに照らされる委員長や副委員長はさぞかし絵になるだろう。うむ。そういうのを見るのは目の保養で嫌いじゃないのだ。

随分と見慣れたけど、やっぱり綺麗なものは綺麗なのよ。

そんな時に響いた驚いたような声。

「あらー」

「あれ」

「ん？」

上から順に副委員長、委員長、緑化委員の声なんだけど、何だろう。誰が選ばれたんだろう。見逃すまいと目を凝らしてたはずなのに、見失ったと！？

えええー。冗談嘘だよな？？

忙しなく辺りを見回すけど、光は何処にもない。

「何処いった？？」

まさかフリ？ 空回り？ 勇者はいなかったとかっていうオチ？ 私の異世界安全見学ツアーは何処いったの！？」

興奮のあまりグツと掴んだ委員長のシャツが酷い事になったけど、気にしない気にしないーい。

「はるちゃん俺のシャツ」

「即クリーニングだから大丈夫！」

「いや、うん。そうなんだけどねー。ってだから羨ましそうな目で見てるなよ」

「あらー。仲良しさん」

正直力オスだと思っただけど、日常風景だからホント気にならないんだよね。というわけで、もう一度しっかりじつくりとローブ集団を見てみる。

杖から光は出てるから、消えたわけではないらしい。

注意深く杖から出ている微かな光を追っていくと、とある不思議な事に気付いた。

「…あれ？」

細い細い光の線。

「あれれ？？」

何でか私の身体がぐるぐる巻きにされているような気がする。

「あつれー？」

光を確認して、杖を確認して、最後に自分の身体を確認してみた。やっぱり自分の身体に光がぐるぐる巻きされてる気がしないでもない。

「勇者様つつ！！！」

そんな私の疑問を肯定するように、ローブ集団が叫びながらぞろぞろーっと私の周りを囲もうとしたけど、それは委員長と副委員長と緑化委員の威圧で阻まれた。

蛇に睨まれた蛙のようにローブ集団が、一箇所で纏まりながらも頑張つて私を見てくる。

「勇者様！！」

「おお、これぞまさしく勇者様だ！」

口々に叫んでるんだけど…。

「すいませーん。私の何処が勇者なんでしょうーか？」

このチート集団の中の地味な一般人の私の何処に、勇者と呼べるべき素質があつたんだろうか。

モンスターが出てきたら逃げるよ。怖いから。

魔王となんか対峙出来ないよ。やっぱり怖いし。

剣も杖も武器なんか持ちたくない。あんな重たそうなもの振り回せませんって。

「戦いなんて出来ないよー？」

腕力もなければ逃げる足もないし。

勇者の素質なんてないよってはっきり言えば、ローブ集団が揃って首を横へと振つ

た。一斉に動かれるとかなり不気味。

「勇者様には、魔界への扉を閉めてほしいのです！」

「そうです。あの扉は、人より優れた存在——人から負の念を向けられるような存在には決して近づけない扉なのです！」

「念に引つ張られ捕りこまれてしまいますし！」

「だがしかし、勇者様になれば問題なしに閉められるはずです！」

ん？

んん？？

なんだろうな、この引つ掛るものの言い方は。

なんだろうなあ…この納得出来ない感じは。

「貴方様こそまさしく空気！ 人に負の念を決してその身に受ける事はない可もなく不可もない稀なる方！！ 勇者様としてこれ以上相応しい方はおりません！！」

感極まって泣かれたただけどさ…。

「……これって怒っていいのかな？」

思わず呟いてしまった私の言葉に、委員長も副委員長も緑化委員も小首を傾げる。どうやら、薬にも毒にもならない存在＋だけど癒しにはなるかも〃私という事らしい。

つまり、ローブ集団の言葉に納得しやがったのだ。

ええいこの規格外集団め。

私の影が薄いんじゃないくて、君たちの存在が濃すぎるんだって!!

今から三日ほど前に、空気Ⅱ勇者認定をされました。

元々勇者認定なんて対岸の火事とばかりに見物を決め込んでいたけど、まかさこの世界の勇者がチートじゃなくて空気だとは思ってもしなかったけどねっ。

まあ…けれど皆で異世界ツアーに行こうね！っていう話しになって、当初の目的は果たせそうだから全然いいんだけど。寧ろ超がつく安全異世界見学ツアーだよ。

山賊も盗賊も魔王も魔物も瞬殺集団だよ。怖いなんて事があるわけない。逆にこのチート集団を獲物に狙っちゃうのが空気読めてないよね。

雑魚臭を漂わせる所か、盗賊A・B・Cなんてそんな配役で終わっちゃうね。

取りあえず異世界ツアーに挑む前に、一応皆で勉強をしていたりとかするんだけど、流石チート集団。

常識の定義が分からなくなるような方法であっさりと知識を吸収していった。25人全員がね！

言葉さえ通じればあの人たちだから大丈夫だと思ってたんだけど、実は言葉が違ったんだよね。召喚された洞窟が特殊な石で出来てるらしくて、そこから出た瞬間ローブ集団の言葉なんて全然意味不明なものにかわっちゃって、正直途方にくれそうになった。始めの数秒だけ。

「あ・い・う・え・お。そちらに出て発音してみてくださいね」

そう。すぐさま副委員長が行動を開始した。

ローブ集団は余程威圧が堪えたのか、蛇に睨まれた蛙のように震え上がりながらも、副委員長の言葉通りの行動を繰り返した。

始めは五十音だったそれは、一度やり終えたらその後は長い長い言葉の羅列を副委員長がいい、洞窟の外にたつローブ集団の一人がひたすらその言葉を口にする。それを5分程やった所でかな。

副委員長だけじゃなくて、私以外の全員が覚えてたよ。うん。見事に。

文字も洞窟の外だと日本語外になったんだけど、同じ方法であつさり取得してたよ。勿論私は無理だったけどね。

覚えようとしてたら、さっき美術部員から腕輪を貰ってねー。

翻訳機だって。ちなみに携帯電話つばい付属効果もつけてあるらしくて、迷子になつても連絡が取れちゃうといういたせりつくせりクラス全員分作つたんだって。皆で行くからね。全員分必要だよ。ね。なんか加護もつけてあるとか。お金とかはどうしたのかなあ。これだけ作るとそれなりに掛かつちゃうよね。

「……うん、考えるのはやめよつと」

他の24人は何をやってるのかなあ、なんて思ったけど、追求するのはやめておく。きつと色々やってるんだよ。

委員長と副委員長と緑化委員は何でか交代で私にぴたりとついてるけどね。

ちなみに今の時間は緑化委員がジィツと私を見てたりする。緑化委員が来ると、身体に穴が開くんじやないかと思うぐらいジィツと見られる。

つつこまないけどね。相変わらずつつこむ気はないけどね。

手に持つてるオレンジのリボンは何？なんて聞かないからね。

「リヨウ」

けれどつつこまなかったら、緑化委員からつつこんできた…。聞

かないフリをする私に対して、緑化委員は両手を素早く交差させる。
「ん??」

何? 何をやった…って……。

リボンじゃなくて、スカーフみたいなふわふわのヤツでした。あの一瞬で私の首にこれを巻きつけ、リボン結びにしたらしい。

「これ…何?」

一体何がしたいのか。

これでハムスターのリーくんがリボンをつけてるからなんて言うものなら、リヨウっていう呼び方禁止令をだそう。

人知れず、胸の内でごっそりと決意をした私に向かって。

「リヨウ。呼び方は、変えない。そしてこれは防御布だ。如何なる危険もリヨウを害する事は出来ない」

ナチュラルに人の心を読んだ上に、どうやら防具らしい。分類的に防具の中のアクセサリって感じだけど。

如何なる危険もって言い切れちゃうのがすごいけどね。

「所で、何でリボンなの?」

防具だったら耳飾でも指輪でも腕輪でも何でもいいはず。

「リーくんと色違いだ」

……言い切っちゃいましたよこの人。

異世界に召喚されて3日。そんなにリーくんに飢えてたのかぁ。うんうん。可愛い子に会えないのは寂しいよねー。

……。

わかるよ。その気持ちはすつごくわかるよ。

でも、私はリーくんじゃないんだけど！

「当たり前だ。リヨウはリヨウだろ?」

「またもやサラリ、と心を読む発言。」

これでハムスターのりーくと混合しているわけではないという事は、多分証明されたんだけど…。

「どうしてりーくと色違い？」

そのりーくに会った事はないんだけどね。写真すら見てないんだけどね。見たら真っ逆さまに嫌な予感しかないから見ないけどね。

私の疑問の言葉に、緑化委員はキョトン、と不思議そうに目を微かに丸くしながら、さも当然とばかりに口を開いた。

「りーくんのように可愛いからだ」

「わーー」。

ぎゃーー」。

「りーくんの写真を見…」

「ないから!!」

なんかこのままりーくんとお見合いまで発展しそうな緑化委員の言葉を遮りながら、私は力いっぱい叫ぶ。絶対見ないからね！

突き放すように言ってみたけど、緑化委員は引く気はないらしく、ジリジリと私との距離を詰めていく。

そんなにりーくんとの色違いのリボンがツボに入ったのか。ツボに入るからつけたんだろうけどね。

絶対防御っばいけどまったく嬉しくないのは何でかなっ。

「はいはいー。そこまでにしておこっかー」

ここで委員長長の登場。どうやら単独行動でやりたい事は終わったらしい。

「助かったよちゃらお委員長こんな時は役にたつね！」

「はるちゃんって…ホント素直だよねー」

しみじみと呟く委員長。

思わず本音が漏れたけど問題なし！

だって日常範囲だからね。人の心を読むのって。だから黙ってても口に出してもまったく同じ。

ならば口にだした所で問題なんてあるわけない。

「そういう所がはるちゃんらしいけどね。とりあえず資金も集まっ
たし、知識も十分。さっさと扉を閉めて帰ろっか」

「資金…？」

知識は分かるけど、資金ってなんだろう。さっきの美術部員の時
も思ったけど、明らかにこの世界のお金なんか持ってないよね。

しかも25人分+1名分（勿論これは私だけ）の資金支援なん
てするのかなあ。

素直な疑問に、委員長は何処から出したのか布袋から小指ほどの
大きさの石を手の平に乗せて私に見せた。

どのぐらいあるんだろう。結構ありそうだけど。

「これね、魔力を付加出来る石みたいだね。純度の高い魔力を付加
さえ出来れば相当の高値で売れるんだけど、俺たち皆出来たんだよ
ねー」。

高純度の魔力。しかも全属性。資金も何も心配する必要はないし、
支援される必要もないし、帰る為の魔法も魔力も揃ってるし。

異世界ツアーをして帰ろっかー」

「へえ…」

皆って事は、緑化委員もかな？

そう思ってチラリ、と態と放置していた緑化委員を見てみたら、
コクン、と当たり前のように頷かれた。しかも、指先にチラチラと
煌く不思議な光は魔力というヤツなんだろうと思うけど。

「…まあ、いつか」

うん。まあ、いつか。なのよ。

この学園に通う人たちの事を深く考えてはいけない。

ここにいる間は、私の常識には蓋をしておかなければパニックを起こしちゃうしね！

「はるちゃんも十分馴染んでるけどねー」

「リヨウも負けてないがな」

ええい、チート集団が何を言う。

私はあくまで平々凡々一般市民なのだ。

まったく失礼しちゃうね！

あれから二日。

緑化委員にリボンをつけられてから二日……。何故か外せない不思議なリボンを切ろうとする度に副委員長に矛先を逸らされながら二日経ったけど、何故か装備が揃っちゃいました。

全員分。

しかも私以外何でか職業についていたりとかね。剣士とか魔法使いとか僧侶とかね。何か折角の異世界だし、形から入るっかなんて言っちゃってたけど、これって初期装備じゃないよね。絶対。

輝かしいばかりの光を放つ色とりどりの装備品の山を見つめながら、私はその場を動けずに考え込んでいたというか何というか。

冒険の初期といえば、木の盾や木の剣や皮あてのような装備品で、精々スライムレベルのモンスターと戦闘を繰り返して、セコイ経験値とお金を入手しながら町の周りをぐるぐるする。それが定番だけど、何度見ても思う。このいかにもレアですと言わんばかりの存在感を放ちすぎる装備品たちは。

恐れ多くて手に取る事も出来ないし、ピカピカ過ぎて指紋が付きそうで嫌なんだよね。持っちゃったら。

思わず眉間に皺を寄せてたら、いつのまにか沸いてきた委員長が私の肩をポンツと軽く叩く。

「はーるちゃん。はるちゃんは勇者だから、装備品はこっちなー」

「私の装備品もあるんだ」

ものすっごくイライナインだけど。思わず脳裏にそんな言葉が浮かべば。

「そんな事を言わないでつけてみて。皆で考えて揃えたんだよー」

委員長が即座に言葉を返してきた。

「毎度の事で今更つつこむのもどうかと思いつつもつつこむけどね！ まったく声に出してないのに何で会話が可能なのかなあ」

「というかさ。イラナイって言い切れる理由って分かるよね。分からないなんて言わないよね。寧ろ理解しろと胸倉を掴みたくなるんだけじゃないよね！

絢爛豪華な装備品の一角に、明らかに首を傾げなくなる物が一式。いや、シヨボイというわけじゃないんだよ。

レア感たつぷりなんだよ。

薄手なのにこれでもか！って威圧感もあるんだよ。

なのに首を傾げなくなってしまうあの魔の一角。

「はるちゃんてば相変わらずおかしー。可愛いじゃないか。ね？」

「おかしいのは委員長の頭の中だと思うけど、やっぱりアレがそうなんだ？ 今だったら冗談で済ませられるよ？？」

「あははー。俺たち冗談って言った事ないよー」

「……………」

このちゃらお似非笑顔イケメン委員長がつ。

「あれ…なんかちゃらおと委員長の間に増えた？」

「知るかそんなもの！！ この際ものすつく仕方ないけど、緑化委員がくれた絶対防御のこれは我慢してつけるから、あれは嫌だっ」

折角の異世界ツアーなのに、何故生き恥を晒さなきゃならんっ。

力いっぱい叫びたい。

あれは生き恥だ！！

「リボンはものすつく仕方なくつけるんだー。絶対防御の加護付

きなのに流石はるちゃん。まあ、そう言ってもはるちゃん以外がつけたら呪われちゃうけどねー」

「……………」

「絶対防御の加護が反絶対防御加護無いっそのことひとおもいにヤレに変わるんだよねー」

「……………」

この人、何言っちゃってんの？？
というか何そんな物騒な物作っちゃってるのかなーってたった3日でこんな物作っちゃってやっぱチートは桁違いだよねー意味分かんらん。

しかし、無表情でジリジリと距離を詰めるのが、この危ないリボンを作った緑化委員なら、委員長は笑顔でジリジリと距離を詰めていく。

今も、私の心の声に「ワンプレスだねー」なんて笑いながらも隙なんか一切見ずに近付いてくる。ううーむ。副委員長は何処に行っただんだろう。

副委員長ならばまだマシ！
きつと助けてくれるはず！！

「ああ、無理じゃないかなー。だって、メイン副委員長だから」

一縷の望みに縋る私を、目の前のちゃらお委員長は容赦なく叩き落す。

「皆で考えたって言ったでしょー。まあ、反対意見が一人だけ居ただけだね」

「…緑化委員でしょ」

「正解。よく分かったねえ。ちよつとは愛が芽生えたりしちゃった??」

「あははー。相変わらず委員長つてばおかしいよねー」

私の虚ろな声が響くけどそんなものは知った事じゃない。

この状況で分からないはずがないのだ。

なんたつて異彩を放つ装備はね。

レイピアのような細身な刀身に、柄には銀の鳶の様な物を細かく巻きつけた剣。

白のブーツはもこもこで、天使の羽をモチーフにしているのか横から可愛らしく純白の翼があしらってある。

そしてそのブーツすらをも呑み込むのは、真っ白な綿毛のようにふわふわの純白ローブだ。

フード付きのそれは明らかに、ブーツなんか目じゃないものがついてる。

真っ白の。

ふわんふわんの。

猫耳と尻尾つて誰の趣味??

緑化委員の反対理由としては、ハムスターじゃなかったからだと思つ。委員長言うように愛が芽生えたわけでもなんでもなく、すつとくすくすく分かりやすい単純な理由だと思つけどね。

ちなみに、ローブの下衣装も可愛らしく、所々ピンクをあしら

いつも、ローブに合うように作られててね。

多分、あれ、見るからに明らかに私にサイズピッタリですよー。
っていつサイズを把握した！？

「というわけで、俺に手取り足取り着せてもらうのと自分で着るの、
どっちがいい？」

そんな私の疑問に答える事無く、にっこりと綺麗な笑みを浮かべる委員長。

超笑顔な人好きのする表情を浮かべながら近付いてくるちゃらお委員長が、この時ばかりは悪魔に見えたのはきつと気のせいじゃないはず！！

結果…。

着ましたとも。着ちゃいましたとも。

現在進行形で生き恥を晒しておりますとも！！

というか猫耳尻尾の空気勇者って何？

こんなふざけた格好で世界を救うって何？

後の方で、可愛いよー。ふざけてないよー。何て声が聞こえるけど、スルーです。ホントスルー。

こうなれば異世界ツアーなんてのんびり言わずに瞬殺ですよ。皆がね！

「というわけで緑化委員！ 唯一反対の緑化委員が風をきって突き

進むんだ!!」

「……終わったらリーくんとおそろ……」

「このリボンを家宝にするから頑張つて!!」

恐ろしい。

猫耳尻尾の次はハムスターってありえないよね。

緑化委員の言葉を遮って言った私の言葉に、緑化委員は考えるような素振りを見せたけど、小さく頷いた。

「ああ。それも悪くない。リヨウと常に共にいるしな」

「……………」

あれ??

何か路線がずれちゃった???

「あらー。遼さんと常にいるのねえ。私も何か作ろうかしら」

緑化委員の言葉に、何故か副委員長ものつかる。

「そういう事じゃないからね! この場合の家宝って大切にしまっておくって意味だからね!!」

叫んだけど修正は間に合わず、副委員長と緑化委員はすっかりやる気だ。しかも委員長が良い笑顔を浮かべてるし。

「……はあ。早くお家に帰りたい」

異世界ツアー所じゃなくて、この時ばかりは心底思ったね。やっぱり自宅が一番だって。

流石の私にも、猫耳猫尻尾はダメージが大きいよねー。

鏡は見ないでおこう。

ダメージが大き過ぎて立ち直れなくなりそー…。

服を着て歩くだけで募る精神的ダメージ。

凄いの。凄過ぎるよ。

だって周りがレア感たっぷりな装備を身に纏った絢爛豪華な人たちと、コスプレな私。いつもは周りに紛れて目立たない私なのに、逆にこのシンプルなコスプレが視線を集めるっていうかねっ。

普段は感じる事のない人たちの視線に、流石の私もタジタジですよ。まったく。そんな私の心境を考慮してか、異世界ツアーは後日のんびりするという事で、早々と森へと入ってくれた一行。

「後日？ ああ。扉を閉めた後にね」

そしたら、普通の村娘みたいな格好で出歩こう。そんな事を思ってたなら、隣を歩いてる委員長が「ん？」なんて不思議そうな眼差しを向けてきた。

「違うよーはるちゃん。一回地球に帰って、誤差を確認した後に改めてだよ」

「……行き来自由なんだー。へえー。そっかー」

「勿論だよ。何かさー、転移は難しいとか修行が必要だとか言ってたんだけどね。このくらいじゃ必要ないのにねえ」

「…………へえ」

付き合いがそれなりに長くなっちゃった私が保証しよう。

これは委員長たちの素だ。悪気なんかまったくない本音だ。彼らにとっては出来るのが当たり前で、こっちが感じてるチート、なんて表現には首を傾げる。

チートも何も、彼らにとってはソレが当たり前だからねー。

というか、私を取りあえずこの世界の絵本を読んでる間に、この人たちは何をやってたんだろうねー。絵本？ 遊びじゃなくて勉強だけだね。

単語を学ぶ為に、分かりやすい絵本って形をとったけど三日じゃあんまり身に付かなかった気がしないでもない！

結局、美術部員の作ってくれた翻訳機大活躍…はしてないけどね。あんまり話さないし。

ホントこの人たちってチートだよねー。次元を跨いでもチートはチートなんだと実感する中で、緑化委員はオレンジのリボンを家宝にする言葉が効いたのか、先頭をきって歩いてる。

その隣には、煌びやかな銀の刀身と、柄には龍が巻きついた剣を手に持つ剣道部員。お祭り部員は何故か枝から枝へと飛び移り、目に付いた何かに呪文を放ってるらしい。

大所帯一行の周りが光り輝いているのはきっと、お祭り部員の魔法というヤツなんだろうけど…。

スライムってグロイよねー。

斃すと宝石みたいな落とすんだー。

あ、こっちは動物型。

動物型は見たくないなあ、なんて視線を逸らそうしたら、中間辺りにいた保健委員が何故か前まで歩き、綺麗な銀水晶のついた杖を翳した。

その効果なのかどうなのか。彼女が瞳を開けたと同時に辺りに小さなふわふわの羽根が舞い上がる。

舞い上がった羽根一つ一つが光を放ち、動物型の魔物を包み込んだ。

「あれ何やってるの？」

確か彼女は僧侶だったっけ。

あまりに職業が多すぎて把握しきれないんだよねー。

「あれは癒し効果だね。核が汚染されてるから動物が魔物化するとかでさー」

「へえ…という事は？」

「この辺り一帯を浄化すれば魔物は動物に戻るか蒸発するから、安全になるって事」

「……辺り一帯？」

「ほら、済んだ」

確かにものすごい広範囲に羽根が散らばってるよね。うん。そういうのって多分ものすごく体力とか精神力とか使うと思うんだけど、保健委員は全然平気そうだ。

寧ろ後十数回は軽いですよ。なんて素敵に笑う彼女の底は知れなかった。

流石大人しめでもチート集団の一員。

常識の範囲外存在らしい。今更だけど。

「うわー…すごいね」

辺り一帯キラキラ。しかし似合うなあ、こいつ等。キラキラの背景に負けない所か勝ってるね。

「浄化完了です」

キランキランとした輝かしい背景を背に、保健委員がにこやかに微笑む。うむ。癒し系の笑みだ。

副委員長とはまた違う微笑みだよなあ。

しかし、その杖重そうだよな……そのずっしりとしてそうな銀水晶。鳳凰を形とっているのか、片羽根ずつを羽ばたかせ水晶を包み込んでいる。しかも杖の土台部分の棒状のものは長い。委員長の身長ぐらいあるのかな。

直径は3cm程。天辺は鳳凰だけど、なんでだろう。重そうだよな、あれ。

あんな細腕で軽やかに杖を振り回す僧侶。ううん、シスターって

言い方の方がいいかな。あの格好だと。

「はるちゃんどうしたの??」

「ううん。突っ込んではいけない事を確認してただけー」

委員長から不思議そうに言われたけど、解決できない謎でいいんだと思う。そつと胸にシスターの七不思議をしまい込みながら、特攻隊として向かわせてる緑化委員に漸く視線を向けた。

「……………」

保健委員の浄化の後か、皆剣は鞘に収めてる。

でも何かあれ?と思う話してるんだけど、ちよつと聞こえにくいから近付こつかなー。

「異世界ツアーの王道だから地道に歩いてきたけど、浄化も済んだし行くかぁ」

これはお祭り部員。いつのまにか枝の上から降りてきたらしい。

「そうだな。情報は読み取ったか?」

「もつちろん。汚染の元さえ辿つちゃえば魔王の位置なんて今更。

つつーか、祭りは誰も見てない場所でやるもんじゃないって。早く城まで行つちやおうぜ」

「ああ。早く鍛錬に戻りたいしな」

「魔王は俺たちで抑えるとして、リヨウには安全に扉を閉めてもらわないとな」

「あー。確かに。はむちゃんに何かあつたら作らせたチヨコは誰にやりやいいのかわかんねーしなあ」

……………。

今、はむちゃんって言ったよね？

お祭り部員が間違いないのはむちゃんって言ったよね？？

「あ…俺もはむさんにあげるマシユマロが教室だな」

「つーか剣道部員までハムスター扱い！？」

「はむさんってまだちゃんの方がマシじゃない？？」

「リョウ。俺に捕まれ」

「う、ぎゃっ」

呼び方に憤ってたら緑化委員に捕まれ、抱き上げられた。まったく嬉しくないお姫様抱っこ！！

「行くぞ」

「ほへ？」

その瞬間、目まぐるしい程景色が変わった。

「というかチート集団よ。」

「楽だけでももう少し王道ルートを楽しもって気はないのかと思うけど、こんな晒し者認定衣装は嫌だから——…まあ、いつか。」

そんなわけで、目まぐるしく変わる景色が突然真っ黒に変わり、次の瞬間には白い風景になったかと思ったら、それに色が付いて城に変わった。

元々負を司ってるからか、色彩は地味。

黒とか灰色とかそんな感じ。空模様も暗雲立ち込めて、いかにもって感じ。

「すごいねー。景色捻りなし。お約束って感じの城だねー」

「あらら本当だわ。異世界の魔王城っていうから目新しいかと思っただんですけどねえ」

「どうするー？」

「ふふ。ぶっ飛ばしましょう。遼さんの可愛い衣装には可愛い背景の方が似合いますわねえ」

何かね。緑化委員に抱っこされてる間に物騒な会話が展開されてんなーって思ったんだよ。思ったんだけど、つつこむには距離があつてね。

早まらないでっ、とばかりに手を伸ばしてみただけど、それより副委員長の動きの方が早かった。

副委員長の杖は保健委員の杖よりもシンプルだった。

真っ白の細長い杖の先がくるり、と丸くなって、そこに大小様々な輪が取り付けられてる。その輪も真っ白。けれどよく見ると、小さな宝石が埋め込まれているのがわかる。色は様々。

長さは2mぐらいあるのかなー。

そんな杖の感想を言ってみただけど、副委員長が杖を一閃させると、驚きの光景が広がりました。

ああ。まだ驚くんだねー。もう一生分驚いたと思ってただけどねー。

副委員長が杖を一閃させたら空間が切れてね。その切れた空間からなんていうか阿鼻叫喚の図が広がったっていうか。

あ、阿鼻叫喚っていうのは私たちじゃないからね。

何となく人の形っぽい魔物の人たちが悲鳴をあげながら散らばっていく。

理由はわかるけどね。

怖いと思うよ、あれは。

ゲームなんかで見かける召喚獣ってやつ？

あの大きなヤツはバハムートで、他にも白龍や黒龍やもつと大きな龍とかもいる。龍以外にも、火や氷や風や土を纏ったのも出てきたり。

あ、なんか水溜り——じゃなくて、海が登場した。そこから出てくるのはセイレーン？ 派手だね！。登場シーンは。

妖怪もいたりとか？ 和洋折衷半端ないね！

「リョウ、行くぞ！」

「お？」

何故かここで私の手を取り駆け出す緑化委員。

何だ？ 何の漫画に感化された？？

「抜け駆けはんたいい」

お前もか委員長。というか両手を持たれたら走りにくいから！半ば引きずられるように足を動かしてたら、いつのまにか身体が浮き上がった。どうやら二人の魔法ってヤツらしい。

そのままふわりふわりと城の天辺まで行くと、そこに黒い渦が出てた。何もない空間に渦と扉がぽっかりと浮かんでる光景。

異様だよねー。

まあ、もつと異様なのは下の方で繰り広げられてる光景なんだろうけど。

「はるちゃん」

「リヨウ」

「あー… はいはい。閉めてきますよつと」

本当に近づけないらしい二人から離れ、私は普通に渦へと近付く。後ろをちらつと見れば、引っ張られるのを踏ん張って防ぐ二人。

「……チートにも出来ない事ってあるんだー」

まったく嬉しくないけど。

二人からの心配だつていう視線を背中に浴びながら、私はゆっくりと両手を伸ばし、あっさりと何の障害もなくその扉を閉めた。

「そつえば、扉の番人らしい魔王ってどうしてんだろ」

まったく邪魔されないんだけど、と疑問に思えば、下のほうから何故かお祭りの時に流れるような音が聞こえてくる。

……お祭り部員のバックコーラスだ。

ああ、うん。今頃魔王討ち取ったりー。なんて叫ぶお祭り部員が簡単に想像出来ちゃうよ。

扉を閉めた事によってなのか、渦は完全になくなって、扉の空気に溶けるように消えていく。

「お疲れ様ー」

「お疲れ」

渦がなくなればやっぱり引つ張る力は消えるのか、二人に出迎えられるつつまたく感慨深くないハイタッチを一回ずつ。

「じゃ、帰ろつかー。俺さー、はるちゃんに生菓子の詰め合わせ持ってきたんだよねー。流石にちよつと心配でさ」

「…俺もだな。俺は和だが」

「大丈夫。俺は洋菓子だから」

「……帰宅理由って、それ？」

あえて答えず、にこつと笑う委員長。

胡散臭い。心底うさんくせー。

「じゃー皆各自転移魔法発動で帰ってねー。集合場所は教室でー」

大雑把な委員長の言葉に答えるように、何か色とりどりの光柱が天を穿つ様にあがってく。よくわからないけど、どうやら転移という魔法らしい。

いつもだったら人の心の声にも答える委員長だけど、胡散臭いは無視したまま、またもや二人に両手を取られた。この後は二人から光柱が上がって、またまた景色が変わってく。

景色が黒から白に変わって、それに色がついて、気が付けば慣れ親しんだ教室。

「はるちゃんお帰りー」

「リヨウ、お帰り」

「遼さんお帰りなさい」

「皆もお帰りー。お疲れ様ー」

というか、時計を確認すれば日付も時間も召喚された時のまま。流石異世界ファンタジー。

「……っていうか、この衣装のまま!？」

というか、煌びやかな異様な集団になってるんだけど、そろそろ朝礼じゃないのかなーって晒し者決定??

ぎゃー!ー。それは嫌!ー!。

心底叫ぶ私の耳に、チート集団は碌でもない事を言い出してね。

「折角だから、朝礼で異世界召喚発表しよっかー」

「そうですわねー」

「リヨウの晴れ舞台だしな」

「っっーか召喚理由とこんな衣装は汚点だ!ー!ー!ー!」

私がチート集団を阻止できたのかどうなのか。

それは私の名誉の為に黙秘を貫きたいと思うんだけどね。

けれど後日。

すっかり魔法を使えるチート集団が増えたとかなんとか。

まあ、いいんだけどね。

勇者つていつでも地味だから選ばれた勇者だし。

魔法なんて使えなくても困らないもんね!。

……けっ。

あんな衣装で発表されて晒し者にされたら、流石の私も荒みますよーだ。

「ふふ。遼さんったら膨れた頬が可愛い。そんな可愛い遼さんには、はい、あーん」

「あーん……って美味っ。新作チョコー!!」

「こちらは生チョコですわよー。はい、どうぞー」

「ありがとー流石副委員長っ。美味しいー!!」

……決して、チョコに誤魔化されたわけじゃないのだ。
うんうん。

それに美味しいものに罪はないしね!!

誤解召喚・1（前書き）

今回から別視点でのお話しが混ざります。

誤解召喚・1

時間が経つのはものすつごく早くて、あれからもう三ヶ月。

何故か猫耳勇者衣装は委員長の家飾られているとかいう不吉な噂話を聞いたけど、噂は噂！

つつこむ所がなかった事にするから別にいいんだー。

そうそう、後日って言われてた異世界ツアー。ちゃんと行ってきたよ。副委員長が連れてってくれてね。異世界の変わったお菓子を買ってもらって家族皆で美味しく食べちゃったりとかね。

そんな美味しいお菓子の印象が強くなったからかな。黒歴史だったあの世界も今では大好きになったんだけどねー。

まあ、副委員長としか行かないけど。

他の人とは絶対に行かないけど。

まあ、そんなわけでアレが過去になるぐらい平和な、いつも通りの生活を過ごしてた。

そんな日常のとあるよく晴れた日。

普段はあんまり喋らないけど、私にピタってくつついて意思表示をしてくる占い部員が、珍しく手招きをしながら呼んできた。

この子はね、私よりも身長が低いの！

黒いサテン生地のようなキラキラとしたフード付きのマントを被りながら、顔も身体も全部隠しているんだけど、フードから覗く素顔は間違いなく小動物系美少女。なんたって彼女も全てを兼ね備えたチートだからね。

色々と性格上の個性はあるものの、やっぱ素顔は超絶チート集団

の一員なのだ。

けれど、こんなふうに呼んでくるのは本当に珍しいなあ、って思いながら近付くと、恒例のクッキーを渡されながらジェスチャーで耳を請求される。

声が小さいから、よく耳元で内緒話しっぱく話しかける占い部員だから気にせずに、はいっ、とばかりに差し出す。

「はるちゃん はるちゃん」

「何何？」

「あのね」

「うん？」

「今日から寮に泊まらない？」

「うん、嫌だ」

一体何を恐ろしい事を言うのだろうか。

震える身体をギュッと抱きしめて、一般人万歳！何て言いながら占い部員にまた明日とばかりに両手を勢いよく振る。

ちよっと距離が離れてたけどね。

占い部員の視力も優れてるから大丈夫。こんなに離れていても問題なく見れちゃうし。

それに、明日の朝にでもおはよーって言えば大丈夫！

「……落とし穴に嵌っちゃうのに……」

私が立ち去った後にぼつりと、占い部員がどうしようとかばかりに言葉を漏らしていたんだけど、その頃の私はスキップで商店街を駆け抜けてる最中だったりとかね。

副委員長のにつこりな穏やかな笑顔の勧誘さえも断ってるのに、まさか今更言われるとは思ってなかったな！。

まっ。いっかー。

今日の夕飯は牛丼なのだ！

白滝たーっぷりたーっぷりの牛丼！ 白滝に出汁やお肉や玉葱の甘みがしっかりとついて、これがまた美味しいのよ。

白いツヤツヤのご飯にたあっぷり牛丼をよそう。で、忘れちゃいけないのが生卵。気分によっては温泉卵をのつけたりもするんだけど、今日は生卵！

この日の為に一パック300円の卵に手を出したのだ！！ いつもは格安卵先着100名様を狙っていくからね。

そんなわけで、今日は寄り道はなし。

まっすぐお家に帰って皆で牛丼を楽しむんだ！。

歩調を弾ませる所か既にスキップになってるけど、楽しみがあふれ出しているから仕方ない。

ぼーん、と地面を蹴って、着地と同時にまた地面を勢いよく蹴り上げる。

「待っててねー。私の牛丼っっ！！」

「…遅くない？」

腕時計に視線を落とせば、既に10分以上過ぎている。

いつも定時間に教室に足を踏み入れるのに珍しいと思えば、そう思っているのは俺だけじゃないみたいでね！。

ヒコが俺の所来たかと思ったら、肩を竦めて見せた。

それだけで何を言いたいかわかつちゃうんだけどね。あえて何も言わず、俺も首を傾げておくだけに留めておく。

というか、俺に負けず劣らずのお菓子の量だよね！。これで太らないのはちゃんの消費カロリーも気になったりするんだけど、今はその肝心要のはるちゃんが不在だし。珍しく、本当に珍すぎるくらいに影も形も見えないし。

「おかしい。はるちゃんが朝のお菓子タイムを逃すなんてありえない」

通学時間は貴重で、皆がはるちゃんの鞆やらなんやらにお菓子を入れていくんだけど、それははるちゃんの貴重なエネルギーになるわけで。

365日学校がある日は休んだ事のない。寧ろ風邪をひいた事すら見た事のないはるちゃんが、その貴重な時間に不在という天変地異の前触れと言っても過言ではない事態に、流石の俺もどうしよう、なんて少し途方にくれてしまう。

携帯番号…交換してなかったんだよね。

いつでも調べられるけど、本人から聞こうって思ってたさー。

「遼さん。昨日から帰ってないそうですよ」

そんな俺の耳に、マナのおっとりとした声が耳に届く。

「昨日から？　というか、マナははるちゃんの番号知っちゃったりしてたりするのー？」

「勿論ですわ」

にっこりとこれでもかという程自信満々に言われた言葉とその表情に、珍しく俺が苛立ちを表したんだけど、ヒコに肩を叩かれた。わかってるよー。俺たちが甘かったって事だろ？

俺も、ヒコもさー。

「リョウの昨日の夕飯メニューは牛丼だそうだ。待っててね牛丼！と叫ぶリョウの姿が目撃されている。帰らない、なんてありえないだろ？」

微妙にへこむ俺の隣で、ヒコが淡々と事実を述べていく。

マジでマイペースだよな。お前って。

「まー、ありえないよねー。はるちゃんだし。食べ物を見逃す、食べない、なんてありえない。マナ、ヒコ」

つまり、緊急事態発動って事だよなあ。

「今更」

「今更ですわねー」

二人はニンマリと笑い、ヒコは教室から出て行きマナは携帯を取り出す。

さて…と。俺は昨日のはるちゃんの足取りでも追ってみるかな。皆に言うのはその後でも遅くはないだろうしそれに…。

まったく、ホント目を離すと危なっかしいよね！。

ねえ、はるちゃん？

誤解召喚・2（前書き）

今までと雰囲気が変わり、なんとなくシリアスな感じになっておりますので、苦手の方は注意して下さい。

多分、誤解召喚でシリアス？な話しはこれだけになると思います。

誤解召喚・2

パラパラと集まった情報を見ながら、俺はふう、と溜息をついた。情報は集まった。十分すぎる程集まった。

何処で姿を消したか、まで把握した。

が、肝心の行き先が分からない。

仙道——リヨウの言う所の占い部員だ——が最後にリヨウと会ったが、その時視えたモノは穴に落ちるという事だけ。行き先までは分からない。

「…ナオ」

「はいはい」

いつもと変わらない表情でナオが立ち上がる。俺の言いたい事がわかったんだろう。何処に落ちたか分からないなら、そこに行つて道を広げればいい。

運がいい事に、俺たちには数ヶ月前に手に入れた魔法の力がある。この世界でも魔法の力は有効で、昨日開いたばかりの道を手繰る事は容易い。俺は珍しく鞆を肩にかけ、そこにリヨウに渡す食料をこれでもかという程詰め込む。

リヨウが楽しみにしていた牛丼は帰ったら存分に食べさせよう。きつと、不自由な思いをしているはずだ。

「なあ…ヒコ」。俺が切れそうになったらさー、ちゃんと止めてな
ー」

「それは俺の台詞だ」

俺たちのいない所でリヨウを勝手に召喚した輩。
手厚く保護をしていればいいが、もし、手厚く保護していなければどうなるかは……。

「うわ。悪い顔」

「お前もな」

唇の端をくいつとあげ、笑みを形作ればナオからそんな言葉を投げかけられる。俺から見れば、お前も十分悪役面だ。

普段は何が楽しいのかにこにこと表情を弓形に形作っているが、それが基本になっているだけだろう。

「他に準備するものは……って、マナのその荷物は何かなー」

ナオの疑問の通り、マナの持っている細長い包みに視線を向けてみれば、確かに長い。

ああ、その長さは杖か。そう思えば、俺の思考を読み取ったのか
マナが軽く頷く。

そうなると俺も剣を持っていくべきか？

悩んでいると、それにはナオが応えた。首を横に振られ、続けて
小さな石がついたブレスレットが放り投げられる。

「これは？」

「美術部作。空間を捻じ曲げて武器を召喚出来るって代物らしいよ
ー」

「……」

なら、マナのその包みは何だ？と疑問の眼差しを向けて見れば、
マナもマナで基本となる笑顔を濃くしながら、

「ふふ。呼び出す時間は0・1秒ほどでしょうか？」

つまり、呼び出す時間が惜しかったんだな。

俺もナオも十分あやしいが、相変わらず一番暴走するのはマナ、
か。ナオもそれを分かっているのか意味ありげにブレスレットを一
撫ですると、鞆を肩に掛け俺に背を向ける。

相当焦っているナオの背を眺め、俺も人の事は言えないかと、ナ
オの後に続く為に足を動かす。

校舎の外に出れば、誰が言うのでもなく同時に走り出した。

俺たちが走れば5分程で着く。

リヨウが歩いたであろう街並みを視界に収めながら、この世界に
いないリヨウの姿を追い求めるようにただひたすらに身体を動かし
たような気がする。

誰が。

何の目的で。

リヨウを召喚した？

これでくだらない理由だったら。

いや、理由なんてどうでもいい。

俺たちの許可無くリヨウを勝手に召喚する奴等に対して、俺たち
が遠慮する必要は無い。

そんな事を考えていたら、リヨウが落ちたであろう場所はすぐ目
の前だ。しかし、落ちたであろう場所を見ても、見た目は何の変哲
も無い道路だ。

地球の常識で考えれば、穴、なんて開くわけがない。
だが、俺たちには見える。

くつきりと浮かぶ黒い穴。

何処に続いているのかまったく見えない程暗く、深い。

「さあーと。飛び込んでみる？」

表面上は穏やかな笑みを浮かべているナオが、穴を見つめたまま聞いてくる。

「勿論ですわ。この痕跡の主が遼さんを攫った方ですよねえ…ふふ」

魔力の残り滓をガツチリと掴んで、マナが微笑む。

「今更、だな」

ここまで来て飛び込まないなんて事はありません。
そんな事は愚問だ。

「行くぞ」

今度はナオの後ろに続くのではなく、最初に俺が穴へと飛び込んだ。入り口の方でナオが文句を言っているが知った事じゃない。

早くリヨウを保護しなければ。

今の俺にはそれだけだった。

「ぐしゅんっ」

ううー。寒いー。

余りの寒さに、両腕を前で交差させて自分を抱きしめるようにしてみるけど、やっぱり寒いものは寒い。

何でこんな時に雨なんて降っちゃうのかなあ、なんて言った所で仕方がない。

仕方がないけど叫びたい！

寒い！

お腹減った！！

牛丼ぷりーーず！！！！

「うー…ヒモジイ」

さっきからお腹は鳴り過ぎて煩いし、雨の所為で身体が濡れて寒いし。せめてもの救いは、美術部員が作ってくれた腕輪が鞆に入ってた事かなあ。

そのお陰で言葉だけはバッチリだったんだけど、何か会話にならずに城らしき場所を追い出された気がする。それぐらいなら良かったんだけど、ちゃんと街外れまで連れて来られてねー。

そのまま置き去りにされちゃったー、って笑っていいのかなあ。
これ。

美術部員の翻訳機の腕輪も、人に会わなきゃ意味がないんだけどね。

しかし寒いなあ。本当に寒い。

身体の震えが全身に広がってきて、結構ヤバイかなあ、とか思うんだけどね。ここで止まればそのまま凍死かなあ、なんて予想がついちゃうわけですよ。

重たい足を一生懸命動かして動かして、まだ見ぬ民家を目指して亀の歩みながら前へと進んでく。

段々と意識が朦朧としてきて、足が動かなくなってきた。

ああ、ヤバイ。

これはヤバイ。

そう思っているのに、ガクリ、と膝が落ちた。

「うー」

こんな死に方は嫌だ！！

嫌なのに、何でか身体は動かなくてねー。

ちょっとだけ。

そう、ちょっとだけ。

私は持っていた上着で身体を包み込むようにして、樹の幹に身体を埋めるように目を閉じてみた。

うん。まったく暖かくないよね。

冷えすぎた身体が温もりを求めたのか、少しでも温もりを得ようと、私は無意識に手を動かしてた。

迷わず異世界へ通じる薄暗い穴に三人で飛び込んで数分。随分と長い間落ちている気がするけど、方向はバッチリ間違っていない。

マナを確認すれば、しっかりと落下先を見つめたまま微笑を浮かべたりなんかしててさ。知らないヤツが見れば、綺麗とか美しいとか？ 取り合えずマナの見た目を褒め称えるような言葉は尽きる事がないかな。

けど、俺やヒコが見れば、相当きてるなーっていうレベル。

お気に入りの存在を自分の許可も無く勝手に連れ去った事にも怒ってるし、はるちゃんが楽しみにしていた牛丼を食べさせなかった事にも腹をたててるのかな。

はるちゃんが幸せそうに食べてるのを見るのが好きみたいだし。

見てたら、マナが落下中だけど邪魔な布を取り払い、小さくだけど何かを唱えてる事に気付いた。

余程の事が無い限り、俺たちは呪文というものを必要としない。思い浮かべてそれを実行に移そうとするだけ。それだけで魔法という理に干渉できるからね。

それでも、言葉にしようとする場合は、目的をより明確にする為に。

言葉と声によって導き出される不可思議な力を、より安定させる効果があると俺は思ってるけどさ。

まあ、そんなわけでマナが今やってる事は、目的を明確に。更に研ぎ澄ませる為にだらうけど…。

はるちゃんが見たら、すとおぷー！何て言いそうだねー。俺

はまったく止める気なんてないけどさあ。はるちゃんが気にする範囲に突入したら、多分止めるんじゃないかなー。

マナは見るからに魔法系だけど、ヒコと俺は決めてない。なんとなく剣を使ったり、何となく攻撃系。分類的には黒の魔法っていうらしいけどね。その黒系を使うけどさ。そんなヒコは今回、マナに倣って呪文の詠唱を開始してた。

ただの言葉の羅列だけど、その意味を理解すればヒコも止まる気がまったくないって事がわかる。さて、俺はどうするか。

止めないし、俺も暴走もしそうだからお互い様だし。

系統は何でいこつかなー、なんて、着々と準備を進める二人を見ながら、無意識に口角が上がって笑みを形作ってた。

うんうん。本当に面白いよ。

何でかな？

はるちゃんが手厚く保護されてる気がまったくしなくてさー。

思わず、腹の奥底から笑いが出ちゃったね。

本当にさ、面白くて、ね。

落ちて落ちて、突然俺たちの身体を光が覆った。

目が眩むような眩過ぎる光。マナが素早く、闇で目を保護してくれた。ゴーストのような目元を覆った闇の光。全てを呑みこむ様な光もそれに阻まれ、俺たちはしっかりと状況を確認しながら風で身体を包み込む。

ドンツ、という音は、風と地面がぶつかった音。

流石、呼ばれていない俺たちが、召喚ルートに無理やり侵入した衝撃は半端じゃないねー。無意味だけど。たったこれだけの拒絶で俺たちを拒めるわけがない。

突然降って沸いたように現れた俺たちに、鎧に身を包んだ騎士っぽい人たちが一斉に剣先を向けてくる。

あー。駄目駄目。隙、だらけ。

なんで距離をあけて、剣を構えてるんだろうね。

ヒコモマナもその光景を呆れたように見ながら、はるちゃんを召喚した元凶に視線を移した。

見たまんま。国王と魔法使いっぽい格好のお兄さん。どうやらこの二人がはるちゃんをこの世界に連れてきたらしい。

けど、やっぱりというか予感通りというか、はるちゃんの気配を城から感じ取る事が出来ず、無意識に眉間に皺が寄る。

そんな俺の横で、ブンツ、と音をたててマナが杖の先を国王に突きつけて微笑む。

慈愛を讃えたような聖女の笑みで殺気を身体に纏わせ、マナは突きつけていた杖を国王の喉へと微かに当てた。

シャラン、と杖の先に付けられた輪が鳴る。

色とりどりの宝石が付けられた杖は、その一振りで様々なモノを召喚する。あれは見てて楽しかったなあ。

「おお……おおお！！！」

けれど、ここでちょっと予想外の反応って言うのかなー。国王が、いきなり歓喜の声を上げたしたんだよね。マナもヒコも怪訝そうに眉を顰めたけど、明らかに国王の視線はシンプルながらも威圧感さえ放つマナの杖に注がれてる。

辺りをさっと見回せば、見てるのは国王だけじゃない。魔法使いも騎士も、マナの杖を凝視したまま歓喜に身体を震わせてるよねー。

「これぞまさしく勇者一行の召喚師の杖！ この光り輝く魔力は間違いない！！ この間の偽者などとはまったく違う輝き！！！」

「「「……………」」」

興奮状態で色々と暴露している国王を、俺たちは冷めた眼差しで見てただけどき、もうちょっと調子にのつてもっともっと暴露してくれないかなー、なんてヒコと視線を合わせてみた。

「（とりだすぞ）」

「（オツケー）」

勿論アイコンタクト。

俺とヒコは腕輪から武器を取り出し、それを天に翳すようにしながら国王に見せ付けて見た。

すると、国王や周りの反応は予想通りだったもので、結構呆れち

やったね。

「おおおおお！！ 勇者殿。あの異世界のように我等の国も救ってくれ！！ 我等の国も魔の扉が異空間より現れ大変なのだッ」

興奮しすぎて血管が切れちゃうんじゃない？ っていうぐらいのテンションのあがり方。というかさ、このままいくと俺たちが聞きたくない事まで喋っちゃいそうだよー。

聞きたくないって事は勿論はるちゃんの悪口ね。偽者、だけでもカチンってかなりというかすごく腹がたったのにさ、この後何か言われたら本当に容赦なんか出来ないよ。

とりあえず感極まった目の前の国王と、周りの騎士とか魔法使いとか黙らせようかなあ…なんて考えたのが悪かったのかな。

俺よりもヒコよりも先に、ブチッ、という音が響いたかと思うと、マナが突きつけていた杖を横に一閃した後に天へと翳した。

ああ……うん。ブチ切れたね。

予想通りっていうか、なんていうか。

マナの攻撃に巻き込まれたら、俺やヒコでも結構なダメージを食らうから、ステップを踏むように何歩分か後ろへと下がる。

その時間はたかが一秒程。けど、マナにとってみたらその一秒は十分すぎる程有効活用出来たらしく、唱えていた呪文を次々と解き放っていく。

だから今まで無言だったんだけどね。

「ふふ。うふふふふ。可愛い遼さんの食事の邪魔をしたただけでは飽き足らず、本物の勇者に向かって偽者と暴言を吐きましたのね。

あら。あら。偽者、だけじゃないんですのね。遼さんに言ったのは…」

マナの威圧感に完全に呑みこまれて、国王たちは顔を青ざめさせ

ながら身体を寄せ合うようにして俺たちを見てる。

ここまでくると、会話なんか成立しないよね。

なんか前にも見たような光景だけど、俺の気のせいじゃないよね
！。

「さあ……私の怒りをその身に浴びていただきましょう。ねえ……
覚悟はよろしいでしょうか？」

こんな時のマナの笑みは、正直凶器だと思うねー。

だつてさ、笑みだけ見てたらまさしく聖女だよ。何回も言うけど
さ。

でも、今のマナは表情だけそれで、背景はまさしく鬼が島の大鬼
つて所かな？

「ナオ。ここはマナに任せて、俺たちは痕跡を辿るぞ。リヨウの痕
跡が消える前に……ああ、くそ。マナに持っていかれたな」

ぼけつとしながらマナを見てたら、今度はヒコに持ってかれた。

ヒコはここでお仕置きをしたかったんだろうけど、マナに持ってか
れちゃったから悔しそっただけだね。

まあ、はるちゃん探しは重要なんだけどさ。

だからお仕置きよりも優先度は上なんだけど、やっぱりあの会話は面白くなかったんだよね。

で、俺はその最重要な事も「」にもってかれてさ。はるちゃんさ
え見つかればいいんだけど——なんだろうな！。

今回、俺って結構鈍くさい？

誤解召喚・4

ふわりふわりと私の周りを食べ物が漂う。

食べれなかった牛丼！

副委員長がくれたホールケーキ！！

委員長や緑化委員や他の皆がくれたお菓子の数々！！！！

存分に食べれてた食料なのに、お腹が盛大に鳴った所で口に入るものは何も無い。手を伸ばしても伸ばしても、その分だけ食べ物が遠ざかる。

ヒモジイ。

本当にヒモジイ。

お腹すいた。

水飲みたい。

兎に角食べ物欲しい！！

叫んでも、やっぱり見慣れてた食べ物は遠ざかるだけだった。

くすん。

本気で泣きそうになった所で、突然口の中に生まれる温かな食感。仄かな塩味。これはスープかな。喉に流れ込む食感と味は優しいも

ので、病人食つぽい。

けど、そんなスープあつたかな、なんて辺りを見回してみるけど、そんなものは何もない。でも、次から次へと口の中に放り込まれる食べ物。

むぐむぐととりあえず噛みつつ、喉の奥へと流し込んだ。

ほう。生き返るゝ。

暫くの間口の中に生まれる食べ物を味わいながら、さつきよりは余裕のある精神状態で辺りを見回して見た。

何もない真っ白な部屋？

「夢…かなあ」

流石に、これは現実じゃないだろうと思う。

眠る前の事を思い出せば、樹の幹にもたれ掛かって死ぬようなフラグを乱発させてたはず。となると天国？

でも、天国だったらきつと、目の前には美味しいご飯が沢山置かれてるはず！

という事で、夢の中だと決め付けながらその場に座り込んでみた。何もないから、何もやる事が思いつかない。

どうせだったら自分で食べたいけど、肝心のスープが見当たらないから仕方ない。そんなわけで、口の中に生まれ続ける食べ物をひたすら咀嚼してみた。

結構な量を食べてる気がするけど、まだまだお腹がすいてる気がする。

やっぱり固形物を食べなきゃ駄目かなあ、と呟いた私の耳に、聞きなれない声が届いた。

そろそろいいんじゃないか？

ああ。もういらないか。

じゃあ、このスープは片付けて…。

「——ッッ!？」

なんと不吉な事をつつ。

「もっと食べるッッ!!!！」

そう叫んだ私の前には、突然色々な色で溢れかえった。

「ほえっ??？」

ちよつと馴染みの薄い室内だけど、家具や窓がある部屋になった。

「「「……………」」」

そして二頭身な小人が沢山いる…。

しかも、ジッと見てる…？

「…………えーと…」

「「「……………」」」

やっぱり小人さんたちは無言のまま私を見上げてるんだけど、その手が持つ器から湯気を放つそれはまさしく、さっきのスープ！

小人さんじゃなく、ジイツとスープを見出した私に、スープを持っていた小人さんは恐る恐るといった感じで差し出してくれた。

「ありがとう！！ いただきますっ！！！！」

半泣き状態で受け取って、それをスプーンを持った自分の手で口の中へと運んでいく。ジイインと染み渡る仄かな風味と温かさ。

「生き返る… ホントに美味しいい」

はぐはぐと食べてたら、別の小人さんがパンらしきものを持ってきてくれた。やっぱり湯気をたててる。焼きたてって感じのパン。お礼を言いながらもそのパンを頬張る。
美味しいiiiiiiii

素朴な味だけど、身体に染み渡るといっかなんというか。小人さんたちが次から次へと持ってきてくれるから、お礼を言いながらドンドンと食べていった。

「ありがとう。生き返りました！」

手の平サイズのパンを10個。
スープは6杯。

それにサラダと美味しいお水。
腹八分目でいい感じだし、ひもじかったお腹が満たされて漸く一息つけたような気がした。

…けど、ここは何処だろう??

ログハウスのようなシンプルな作り。
必要最低限の家具に、奥には小さなベットが5つ。小人さんは五

人だから、間違いなく小人さんたちの家だと思うんだけど…。

「えーと…助けてくれたんですね??」

これだけ食べといて今更だけど。

そう思いながら聞いたら、始めにスープを差し出してくれた青色の髪が眩しい小人さんが、微かに目を細めた気がした。

「助けた――が、それよりアンタが落ちてきた。が正解だ」

小人さんが指差すのは、天井。促されるままに視線を上げてみれば、天井の隅に人が一人入れそうな穴が開いてる。

「あれ?」

じいいと見て見たら、穴が結構上の方まで続いているのが分かったんだけど、その通路つばいのが樹の幹に見えなくも無いんだよね。

「あれれ??」

私が最後に見た光景も樹の幹だったような。

「…あそこには、ここへの隠し扉があったんだ。アンタ、運がいいな」

「んー…隠し扉。まったく気が付かなかったけどありがとう! ご飯美味しかった!」

隠し扉から落ちてきた見知らぬ人間にご飯をくれるなんて、何て良い小人さんたちなんだろう。

につこおと頬を緩めながら小人さんたちにお礼を言ったら、赤い髪をした小人さんが私の鞆を指差した。

「アンタは…森の加護があった。だから助けたんだ」

「んん??」

森の加護?

そんなもの… ってまさかつ。

鞆の中には緑化委員から貰って家宝にしたリボンが入ってる!!
なんか私以外が付けたら不運過ぎる装備に変わる、多分レアアイテムっぽい効果があるやつ。

美術部員が作ってくれた翻訳機と一緒に鞆の中に入れてあったんだよね。

「ごそごそとそのポーチを取り出して小人さんに見せると、それだ！って次々に指を指された。

「すさまじい森の加護を感じます。森の王が加護を与えたような輝きです」

緑の髪の小人さんが、瞳を潤ませながら手を組んでリボンに拝みだす。

他の小人さんたちは緑の小人さんよりは淡泊な反応なんだけど…
…色なのかな?

緑の小人さんが拝む横で、今まで沈黙を守ってた白と黒の髪の小人さんが私へと近付く。

「アンタ… そんなものを持つてるなんて、勇者か?」

始めに、黒の小人さんが口を開いた。

続いて、白の小人さんが黒の小人さんの言葉を付け足すように、真剣な眼差しを私に向けながら恐る恐ると口を開く。

まあ… なんていうか言われた言葉に吃驚したけどね。

本当に吃驚したけどね。

「七色の魔力を操り、神魔獣に従え異界の扉を閉めた伝説の勇者様
ですかっ」

「……………は？」

いやいやいや。

その色々とごちゃまぜになつた噂はなんなのかなつ。

寧ろ空気だから！

空気勇者で扉を閉めたから！！

だからそんなにキラキラの瞳で見上げてこないで、と言葉に出来るはずもなく、どうやって誤解を解こうかと心底困ったね！！

なんとか誤解は解いたけどね。

なんとか解いたんだけどさ。

空気勇者で納得されるのもなあ……微妙だよな。

多少眺めのよくなった城を背にし、俺は転移の準備へと移る。リヨウが呼びだされた場がすっきりとしたからなのかはわからないが、今まで通じなかったリヨウへの心話がどうやら可能になったらしい。

「ヒコー。心話は通じないっぽいよー」

が、どうやら通じないらしい。

可能性としては、リヨウが閉ざしているか意識を失っているか。リヨウが態々こちらからの呼び方をブロックするはずがない。つまり…。

そこまで考えて、俺の背後から何かが溢れだす。

やはり、木っ端微塵にしておくべきだったか。

物騒な事を考えながら、俺はある事を思い出した。

どちらかというと、どうして今まで忘れていたのか。と自分を叱咤したくなる。

「リヨウに渡した防具だ。リヨウから離れない魔法もかけてある」

俺の言葉に、ナオは「あ、そっかー」といつも通りに声をあげると、マナと向かいあって一回だけ頷きあう。

「辿れそう?」

一応、とりあえず。

そんなふうに、ナオは俺に対して確認の意味を込めて聞いてきた。

「辿るんじゃない。報告させる」

だが、俺はソレを否定する。

俺が作った防具を辿る事は可能だ。だが、心話が通じない場所にいるリヨウだからこそ、辿ろうとしても何らかの要因で最終的な場所はわからないかもしれない。

そのリスクを負うよりも、俺はこの世界の大地に。自然に。全ての緑たちに向かって魔力を全て解き放つ勢いで声を投げつけた。

俺の魔力を纏う人間を探していると。

これに返答をするか、もしくは返答が難しいならば保護をしてくれ。

そして、もし傷つけようとする者があれば、容赦なく叩き潰せ。

「わあ……肌がビリってきたねー」

俺の無差別の心話が終わった直後、肩を竦めたナオの姿が視界の隅に入った。どうやら、ナオとマナは俺の近くにいたから、魔力の影響を直に受けたらしい。

とはいっても、殆ど影響はなさそうだが。

「あらら。今の彦実さんの魔力で、目を回しちゃったみたいですよわね」

マナのおっとりとした声が響くが、そんな些細な事なんてどうで

もいい。マナの置きを受けたこの国の王たちが数時間意識不明に陥ろうが、俺にとっては関係の無い事だ。

実際、それを口にしたマナにとってもどうでもいいのだろう。相変わらずナオは思考を読ませない飄々とした表情で、小さく何かを呟いている。俺が自然を好み、そして好まれるように、ナオの場合は風と相性がいい。全属性を余すことなく最上位の力として扱えるが、その中でも得意なものはある。

「ヒコー。返信があったら、すぐ転移しようか。場は整えたから、何処だって出来るし、さ」

「ああ」

どうやら、可能な限りこの星に風を張り巡らせたらしい。

しかし…ナオの風でもリヨウの居場所が把握出来ないという事は、深い結界の中にでもいるのか……。

「——ッ」

だが、俺の思考を中断させるように声が届いた。

森の住人から。

どうやら、リヨウを保護してくれたらしい。

安堵したように胸を撫で下ろした俺を見て、ナオもマナもほんの少しだけ表情を安堵のものへと変えた。

それでも、自分の目で確認するまで本当の意味で安心は出来ない。俺たちは顔を見合わせた後、リヨウがいる場所の外へと転移する為に魔力を練り始める。

「ヒコ、場所の映像をちょーだい。

俺をメインに転移は発動させるからさー」

「……そう、か。そうだな。これだ」

「あー。うんうん。照合終了ー。はるちゃんの痕跡も発見。じゃ、迎えに行こっかー」

「これはなんだ？」

赤い小人さんに不思議そうに聞かれるけど、逆に私が不思議そうな顔をしちゃったね。この世界ってバターがないのかな？

あ、でも牛乳で簡易バター作ったら驚かれたから、結構珍しいのかもしれない。小麦粉っぽいのはあるのにな。

「このバターでね、デザートを作っているんだよ」

「デザート？」

「うん。ご飯のお礼。これだけあればパウンドケーキが作れるし。ちよつと待っててねー」

あのヒモジイ状況でご飯を差し伸べてくれた小人さんたちに出れるお礼といえ、これぐらいしかないしね。

慣れない道具や材料だけど、白い小人さんが手伝ってくれてるから今の所なんとかなってるし。

興味深げに見てくる白い小人さんに説明しながら、パウンドケーキのもとを型へと流し込んだ。パンが焼けるなら、これもいけるはず。

紅茶もどきとパウンドケーキで三時のおやつ！

いいよね、三時のおやつって！！

今回はお礼だから一切れだけもらって…。

「んー。何？？」

白い小人さんがクイックイと洋服の裾を控えめに引っ張ってくる。小さいからしゃがんで目線を合わせて聞いてみると、もじもじしながら上目遣いでボールもどきに入った材料を指差すと。

「後で、一から説明してもらってもいいですか？」

控えめに聞いてくる白い小人さん。

可愛いなあ。

「勿論だよー。一回じゃ覚えきれないだろうしね。焼きあがるまでにちよつとかかるから、その間に教えるねー」

「はい。ありがとうございます」

にこつと微笑む白い小人さんの頭を撫でながら、型に流し込んだパウンドケーキを竈へとセットした。

さてさて。

これで白い小人さんに教えながら……あれ？

「どうしました？」

私の隣に立つ白い小人さんが、私の様子に気付いて声をかけてきてくれる。でも、私の視線は窓の外に釘付けでね。

何でか緑の小人さんが庭の大木にぴたっと身体をつけて、時折両手を上に上げたり、コロコロと地面を転がったりとちよつと不思議な行動をしてた。

「ああ…時々、彼はあるんですよ。交信中なので、気にしなくても大丈夫です」

「へえ…交信中なんだ」

あえて、何と、とは聞かずにそつと、緑の小人さんから視線を外した。

うんうん。あんな感じで趣味に没頭中の時って見られたくないよね。

その後は白い小人さんにパウンドケーキのレシピを教えたり。

焼きあがったパウンドケーキを二人で味見して感動に打ち震えたり。

バターを興味深げに見てたから、リングにバターと砂糖を振り掛けて竈でサツと焼いたのも用意しながら、人数分を皿に盛り付けて食卓へと並べる。

白い小人さんからの味の保障ももらったからきつと大丈夫。

小人さんたちは初めて嗅ぐバターの匂いに興味津々で、恐る恐るパウンドケーキを一口分だけ口の中に放り込んだ。

鼻腔をくすぐるバターの良い匂い。

どうやら気に入ったらしく、ガツガツと食べ出す小人さんたちを

確認した後、私もパウンドケーキに手を伸ばした。

久しぶりの甘いデザート。

食事も大事だけど、デザートも譲れないよね。

「いただきます！」

小人さんたちよりも身体が大きいという理由で、白い小人さんが厚めに切ってくれたパウンドケーキをはぐり、と口の中いっぱいに頬張る。

ううー。

美味しいiiiiiiii。

やっぱりいいね。

甘いものって！

口の中に広がる久しぶりの甘味。

甘さは控えめなはずだけど、胡桃と干した果実の優しい甘みが身体に染み渡る。

その時、バターン、と大きな音が聞こえ、その直後に懐かしい声が響いた。

「はるちゃんっ！」

「リヨウッ！」

「……………」

はむはむはむ。

委員長と緑化委員だ。後ろには副委員長もいる。

もぐもぐもぐ。

何か甘味と同じぐらい久しぶりに見たなあ。

「うふふ」

何故か不自然に動きが止まった二人と、頬に手を当て微笑む副委員長
の笑い声がシインと静まり返った部屋に響いたんだけどね。

ちょっと待ってね。

久しぶりの甘味をお茶でサツと流し込んじゃうのは勿体無いから！

もぐもぐとパウンドケーキを頬張る私を凝視したまま、どうして
か委員長と緑化委員の二人は固まったまま動かないでいた。

珍しいよねー。

固まるチートって。

誤解召喚・6

三時のおやつは無事終了ー。

固まるチートたちはおやつを食べ終わるまで待つてくれたし、副委員長は食後の紅茶を煎れてくれた。何処からお湯とかティーカップを取り出したかとか色々謎が残るけど、それはチートだからね！

「なんかお迎えが来てくれたから帰るね。ありがと！ ご飯とかおやつとか美味しかったー！」

本当に助かったと言えば、何でか小人さんたちは浮かない表情を浮かべてる。

何だろう??

「ど…」

うしたの？と言おうとしたんだけどね。緑化委員が私の身体を持ち上げて後ろへと下がって、委員長が小人さんたちと向かい合う。

「あら」

副委員長は相変わらず笑ってるし。

どうしたのかなー、なんて緑化委員を見上げてみたんだけど、何を勘違いしたのか脇の下に手をさしこむようにして持ち上げてた体勢をお姫様抱っこに変えてねっ。

「…体勢じゃなくて、なんでこんな感じになったのかなって説明をしてほしいというかね」

「リヨウがいなくて寂しかったからだ」

「うゝむう？」

「ナオに任せておけばいい」

どうやらまったく譲る気のない緑化委員は、言い終えると私から視線を外して委員長と小人さんたちの方へと移した。

「はるちゃんに何か用？ あ、助かったんだよ。本当にそれについては感謝してるんだけどさー。感謝はしてもこの世界とはるちゃんを関わらせたくないんだよねー」

おお。目が据わってる委員長。

いつものエセスマイルはどうしたんだろうねっ。

「あの城で何があったかは何となくだがわかる——が、扉を閉めてほしいんだ——」

おお。委員長の迫力に負けじと赤い小人さんが頑張る。

「別に扉が開いた影響は感じなかったけど？」

あー。魔物とかいうヤツはいなかったよね。

「魔物を生み出す扉じゃないからだ」

へえ。扉も色々な種類があるんだー。

「それじゃ、何の扉なのかなー？」

委員長はエセスマイルでも笑ってる方が平和だよねー。無駄に威

嚇し過ぎっていうか、小さな小人さんたちを威圧してもっていうか、恩人さんを脅さないで欲しいなあ、とかね。

「……身体に影響を与える扉だ。人、以外が主に被害を受けている人以外かー。身体に影響与えるって怖いよね。どんなのがあるんだろ??」

「へえ。それをやるちゃんに閉めてほしいって?」

目を細める委員長はある意味様になるよね！ 地球でもその顔したら別のファンでも開拓するんじゃない?

「この世界の扉は、一回扉を閉めた者にしか閉められないんだ！頼む!!」

叫ぶと同時に、小人さんたちが一斉に土下座をした……。
つて土下座!?

私のご飯の恩人なのにつつ。

「ふふ。遼さん。全部声に出てますわ?」

「ほえ?」

後ろで見てたはずの副委員長が、いつのまにか私の横に立って教えてくれる。どうやら全部声に出ていたらしく、小人さんたちと向かい合っていた委員長も、土下座をした小人さんたちもチラリと私を横目で確認するといつかね。

なんか居た堪れない空気に晒されて、私は副委員長の服で顔を隠させてもらった。

「……俺の胸に顔を埋めるといった選た……」

「はるちゃん。ちよつとはシリアスな空気にさせといてよ。これでもさー。かなり心配したんだよ?」

緑化委員が何かを言ったような気がするけど、それよりも委員長の声が部屋中に響いた。心配ってまさか。

「私がいなくなってからどれぐらい経った?」

前の時と一緒に感覚でいたけど、あの時は皆がいたから時間差は無しで帰れたんだよね。

「半日ちよつとかな。学校に来なかったからね」

「遼さんのお家の事は大丈夫ですわ。ふふ。手配済みですから」
副委員長が、私が一番心配してる事を教えてくれた。

良かった。それを聞けば一安心っていうかね!

「……とりあえず、俺たちがリヨウを守ればいいだろう? 目の前にいれば守る事は難しくはない」

ホッとしてたら、緑化委員がまとめた事を言ってくれた。

どうやら、緑化委員は扉を閉めてさっさと帰ればいいって感じなのかな??

「そうなんだけどさー。つつーかさ、ヒコも怒ってたのに何でそんなにあっさり?」

納得がいかないのか、委員長の眉間には少しだけ皺が寄ってる。

「手助けはリヨウが望む事だ。命の恩人というなら、ここできつちりと清算しておけばいい」

そんな委員長に、緑化委員がはっきりと言いつ切る。そりゃ食事の恩人だよ? そんな恩人に頼まれたら扉ぐらい閉めなきゃっていう気になるんだけどね。

「ああ。これでお互い様。今後はるちゃんに絡んでくれるなとかそういう感じ?」

「俺たちのいない所で呼び出されたくないからな」

「おっけー。というわけで、扉の位置は…」

「場所の特定は済んでますよ」

副委員長が当たり前のように言葉を付け足す。

どうやら二人が話しこんでる間に場所の特定とかをしたらしいんだだけさ。

あれ?

何か、知らない間にどんどんチート集団の間で話しが進んでるよね。

しかしどうやって扉の位置の特定を済ませたかわからないけど、チートは半端じゃないよね。小人さんたちがまったく話しについていけないけど仕方ないよ。

だってチート集団だからね!

慣れてない人たちにはやっぱり吃驚だよ!!

「じゃ、転移開始」

「ふふ。範囲指定。さあ、まいりましょう」

委員長から風が流れてきたかと思ったら、一瞬で目の前が真っ暗になった。何か副委員長の身体から出ているんだけどね。

小人さんが漆黒の王が、なんて言ってるのがちよつと気になるかなー。

森の王とか漆黒の王とか、王って言う言葉好きだよな。

「でも副委員長は綺麗だし漆黒よりは純白の王様だよなー」

副委員長はいつもお菓子をくれて紅茶を煎れてくれて、一緒に買い物に行ってくれるいい人なんだよ！

「うふふ」

「「「……………」」」

その場に、副委員長のいつも通りのおっとりとした笑い声が響くと同時に、何でか委員長と緑化委員と、小人さんたちまで口を噤んで視線を副委員長から外した。

「うな??」

副委員長だよ。純白の方が似合うのに！

そんな私の憤りをわかったのかどうなのか、副委員長が転移を開始する前に私の顔を覗き込むようにしながら微笑を浮かべた。

「遼さん。彦実さんと直雅さんにしっかりと捕まっけていて下さいね」

「わかってるよ。二人を前面に押し出せばいいんだよね！でもさ、それよりも副委員長！。副委員長は黒より白だよね！。なのに何でまた固まっちゃったの??」

「うふふ。遼さんが無事で安心したのが今頃きたんですよ」

「あー。そつか。自分から飛び込んだわけじゃないから仕方ないよ。うな気もするけど……心配かけてごめんね。ありがとね」

「「「……」」」

そかそか。

行方不明になってたんだもんね。

やっぱチート集団でも、行方不明になった人を探すのはちょびつとだけど時間がかかるんだね！。

まあ、十分早いと思うけどね。

だって異世界だし。

探し出せるのが流石チートって感じなんだけどね！

誤解召喚・7

そんなわけで、あっさりと扉の前に転移完了！

今回は副委員長が作ってくれた闇の力とかいうヤツで扉を捕捉したらしい。よく分からないけどチートだから何でもありだよーね！。

「また、近づけないのか」

すっかり見学モードだったけど、私を抱え込んでいた緑化委員が不満気に声を漏らした。そういえば近かったね。お姫様抱っこをされていたよね！

最近じゃ当たり前になって意識してなかったけど、間近で見ても死角なし。美形はどの角度から見ても美形の法則に則っているのか、やっぱり顔だけ見るとかつこいい顔をしているんだなあ、と思う。

食べ物から出る湯気の方が好きだけど。

そんなどうでも良い事を考えながら、緑化委員の言葉に答える。

「私は大丈夫だけどねー」

引きずりこまれないように一生懸命踏ん張っている緑化委員とは対照的に、引っぱられるなんて事はなく、私は完全無欠。ホント、扉限定で無敵になるってある意味むなしいよね。

「じゃ、閉めてくるからー」

既に二回目の扉を閉める作業。

何をするってただ扉を閉めるだけ。

外敵はいないし障害も一切無し。そんなモノがあつたら緑化委員

の腕から降りれるわけもないんだけど。過保護だから。何かよくわからないけどはむちゃん扱いしてるから。

「遼さん。気をつけて下さいね」

「扉に指なんか挟んじや駄目だよ」

副委員長と委員長からの言葉。

「そんなに慌ててないから大丈夫」

閉める時に指挟むって……あるけどね。時々あるけどね。でも今は大丈夫。両手使って押すように閉めるし。

そんな状態で指挟むわけがないしね。

未だに心配そうなチート三人組と、不安いっぱいの表情で見てくる小人さんたち。どうやらお八つで懷かれたような気がするけど……。食べ物はいいよね。お八つは至福だよ。副委員長に連れて来て貰ってまた作るから一緒に食べようね！

「……」

「どうしたの？ ヒコの無言なんて珍しくもなんとも無いけど、機嫌悪そうだよ」

「……また、リヨウの行動範囲が広がったような気がただけだ」

「ああ……それは同感なんだけどさ。何かマナだけが得しそうな？」

チラリ、と二人が切れ長の眼差しを向けてみれば、そこに立っているのはいつもの副委員長。

「あらあら」

口元に手を持っていきながらくすくすと笑う副委員長。

それと同時に閉まる扉。

結構あっさりと閉められるんだよね。

何たってさ。全ての障害がチートたちによって取り除かれているからね！

これが普通の異世界トリップだったら色々なアイテムなんか入手しつつ、地道にレベルを上げながら情報を集めてここまでたどり着くんだろっけど…。

相変わらず一瞬だったよね。流石チート集団ってこの先、何度この言葉を言う事になるんだろっ。

さて。これで帰って自宅で牛丼でも食べよっかなあ。って呟いた時、眩いばかりの光が辺りを覆った。

「おおっ。ファンタジー！」

ここでまさかのファンタジー。皆が居るから飛ばされる事はないと思うけど、ちょっとだけ距離が離れているんだよね。

「リョウッ」

「はるちゃんっ」

って思ったけど、次の瞬間には委員長と緑化委員に抱え込まれた。二人で一人の人間を痛くないように抱えるって器用だよね。

「ふふ。何か楽しい事があればいいんですけど」

折角の異世界ですから。と微笑む副委員長に、そうだねーって思いつつ頷いてたら、やっぱりあっさりと視界を多い尽くしてた光が消えた。

三人の指先が動いてたみたいだから何かしたんだろうっけど。

「…って、あれ??」

目を数回瞬いてみる。

眩しかったから、ちょっと目が変になったのかなー。

「……うーん」

「気のせいじゃないよ」

「ああ。俺も同じものが見える」

「あらあら」

「よくある異世界事情ってやつかなー」

まあ、目の前にはある意味異世界事情のお約束な光景が広がってるっていうかねっ。

小説やゲームなんかではよくあるパターン。王道っていうのかな。

「……戻った」

赤い小人さんらしき人が、啞然とした表情で言葉を吐き出す。

「戻れたんですね……」

自分の手を見ながら、信じられないように言う白い小人さんらしき人。

「ごろごろと土の上を転がって交信してる人は、緑の小人さんらしき人だね。わかりやすいなあ。色は同じだけど。」

「事情説明をしてもらってもいいかなー」

「おや。流石取り仕切るのに慣れてる委員長。私を緑化委員に預けて……降ろしてもらっていいんだけど。立てるからね。赤ちゃんじゃないからね。」

「そろそろ降りたいんだけどなー」

「控えめに言ってみたら、緑化委員はチラリと一瞥しただけで降ろす所か更に抱え込む所が緑化委員らしいと思う。」

「これも慣れたけどねー。」

「お姫様抱っこ。」

「何が起こるかわからない」

「何がってこれ以上起こらないんじゃないかなあ」

「リヨウは俺の腕の中で大人しくしていればいい。何があっても守るから」

「離れてても守れそうだけどねー。チートだし」

「むう。どうやら譲る気がまったくない緑化委員。」

「ふふ。遼さん。私と手を繋ぎませんか？」

「そんな時、副委員長が救いの手を差し伸べてくれた。まさしく手！繋ぐー。というわけで降りるからね」

「……」

「まったく納得いきませんって表情を浮かべる緑化委員だけど、やっぱり抱えられるより地面に足がついてる方がいいよね。」

「あら……手の平に怪我してますわねえ」

「ギュッと手を繋いだら、副委員長に言われた。」

「あれ？ あー。転んだりしたからかな。結構歩いたりしたからちよつと疲れたんだよねー」

「あんなふうに歩いたのは久しぶりだったしなあ。」

「……」

「どうしたの？」

「副委員長と緑化委員が顔を見合わせて、にこり、と無邪気な笑みを浮かべてた。」

「何でもありませんわ」

「何でもない。それより、謎が解明するみたいだぞ」

何だろう？

無邪気な笑みって珍しいけど……まあ、いつか。チートの考えはわからない事がいっぱいあるし。

それよりも、最近じゃあんまり珍しくはないけど、異世界の事情ってやっぱ興味があるしね。じいっと赤い小人さんらしい人と委員長に視線を戻してみた。

どうせ扉の影響で身体が縮んだ、とかそういう話のような気がするけど。

異世界っていったらそういうのが定番だよー。

「魔の扉の影響だ。人間以外に変質を齎し、本来の力を削ぐ」

って思ってたなら、どうやら本当にそうだったみたい。

本当の力が出せないってそりゃ必死になるよね。

「赤い小人さんって呼んでただんだけど、もう小人さんって呼べないよね。赤い大きい人でいいのかなあ」

私よりも小さかったから小人さんって呼んでただんだけど、もう呼べないかな。緑化委員ぐらいあるし。

「小人でいいんじゃないか？ 人間じゃないみたいだしな」

「何でもいいと思いますわ。呼び慣れた呼び方が一番ですわねえ」
「そっか」

そうだね。今更呼び方変えたら舌噛みそうだしね。

「勇者よ。本当に……本当に感謝してる」

委員長からこっちに突然矛先を変えた赤い小人さん。

委員長が手を伸ばすけど、間に合わず宙をきる手を見ながら舌打ちを一回。こうやって見てると委員長も柄が悪くなったよねえ。前は好青年だったのに。エセだけど。

「扉を閉めたただけだよ。他は全部三人がやってくれたし」

寧ろ私だけだったら閉める前に辿りつけてないよね。

「いや。閉めれる、というのが凄いんだ」

「……空気だからね」

「……？」

ぼそり、と小さく呟いた私の言葉に、赤い小人さんが首を傾げる。前の世界で言われてたんだけど、この世界じゃ浸透してないのかな。空気だから閉められる魔の扉って。

「何の事かはよくわからないが……勇者は俺たちにとっては命の恩人だ」

目の前で、赤が揺れた。

今まで見上げてた赤い塊が、何でか恩人という言葉と同時に片膝をつく。上から下に視線を移動していたら、副委員長と繋いでない左手をそつと取られ、何をするんだろうつて思ってたらさも当然のように手の甲に温かな感触。

「……」

手の甲？

に、温かな感触？？

って口付け！？

おおおおおお。異世界っ。ファンタジーっ。日本じゃ考えられ

ないよねっつ。

「なっ」

「——ッッ」

「あらあら」

周りで息を呑む音と、副委員長ののんびりとした声。

「リヨウツ。しっかり捕まってるっ!!」

「うな？」

一転する視界。

うん。この感触は緑化委員だけど…。

「油断も隙もない。やはり抱きしめておくべきだったか」

「それって、チート集団以外が言えばセクハラで訴えられそうだなー」

慣れたからいいんだけど。はむちゃん扱いだし移動するのに楽だし。緑化委員に抱えられたまま変わる視界に一瞬目を瞑って見れば、次にあらわれるのは慣れ親しんだ景色。

「でもちよつと強制的過ぎるよねー。ちゃんと挨拶出来なかったし小人さんたちは命の恩人なのに。頬を膨らまして言えば、そんな事を言われるとは思っていなかった緑化委員からものすごく不満ですと言わんばかりの視線を向けられる。」

「あんな事をやる奴と挨拶をする必要は無いだろ」

「あんな事って、緑化委員や委員長がやってるの大差ないんじゃない

い？」

この抱っこも人の事は言えないよね。

「うふふ。常日頃の行いの悪さですわねえ」

ちゃんと付いて来てたらしい副委員長が、私の手の平の傷を治しながら穏やかな声を緑化委員に向ける。

「…日頃の…」

「日本じゃあーいう習慣は無いでしょ。つまりセクハラはあっち。はるちゃん。あの世界にはもう二度と行かなくていいからね！」

少しだけ時間差があったのか、私の背後。つまり緑化委員と向かい合うように立つ委員長が、見事な棚上げ発言をしたかと思ったら、緑化委員もここぞとばかりに頷きだす。

「リヨウ」

「はるちゃん」

いい子だからとばかりに名前を呼ばれながら頭を撫でられたりしたんだけどね。

「副委員長！ また一緒に異世界に行こうねっ！！」

どっちみち異世界には副委員長としか行かないから。委員長や緑化委員と行った事はないからね。

その事実気付いたのか、二人は副委員長に念を押すように何か言ってるんだけど。

「うふふ。衣装を調べれば映えそうですわね。遼さんにおかしな認識を植えた事を反省した方がいいかもしれませんわねえ」

頬に手を当てるようにしながら、優雅に二人の視線を一刀両断した所は流石副委員長。

うん。

やっぱり副委員長が最強だよな。

何かよく分からないけど、色々と最強のような気がするよな！

生物捕獲・1

前は、寮の部屋よりも実家に帰ってる方が多かった。

寮の場合、自分が使える部屋は2。共同スペースと、その隣の私室。共同スペースは二人で使うんだけど、俺の場合はヒコとある意味同室。折角寮暮らしをするんだから、一人部屋じゃない部屋を作ろう。が始まりだったっけか。

全員で使える共同空間は勿論完備されてる。寮というより、何処かのマンションと言われた方が納得するような充実ぶり。

このぐらいやってもらわないと、誰も寮に部屋はもたないんだけどねー。

まあ、最近は寮で寝泊りする事が増えたかな。

ヒコと話す事も増えたし。

その分ヒコが溺愛するリー君と遊ぶ事も増えたんだけど……未だに、はるちゃん＝リー君というヒコの思考がわからない。

多分、小さい。くるくる動く。頬張るというキーワードだけではるちゃん＝リー君という図式が成り立っているとは思っしね。

「ふわ……」

欠伸を噛み殺しながら、共同スペースに置いてあるハムスター用品のカタログに手をのばす。これは何冊目かな。っていうのは愚問だね。

テーブルの上に置きっぱなしはヒコにしては珍しいけど、昨日は珍しく……でもないけど、確かリー君の新居について真剣に悩んで

いたっけ。

ヒコの宝物であろうカタログを棚の上に置いた後、カーテンを開けて外を眺める。今日もいい天気。少し暑いぐらいかもしれない。

そうになると、はるちゃん用のお菓子は冷たいものもいいかもしれない。

「何にしようかなー」

定番のチョコは勿論持っていくけど。

ヒコとは被らないようにしないと……あれ？

「……？」

目を擦りながら、もう一度庭に視線を落としてみる。

「……あれ？」

何度擦っても、庭にぼてっと落ちている物体は変わらない。動いて、多少位置は変わってるだろうけど。

「何をやってるんだ？」

「…おはよー」

「おはよう。じゃなく」

「あー。うん。ヒコ、あれ見て」

「……？」

怪訝そうなヒコ。でも、アレを見たらきつと全てを納得してくれるだろうと思うんだよね。最近、はるちゃんのおかげで色々と異世界的な事は慣れてきたんだけど、流石に地球でこういう経験をするとは思わなかったなあ。

しみじみと庭の物体を見ている俺の耳に届いたのは、ヒコの何とも言い難い声。

「毛がないな」

「大体はないよね」

…ヒコも結構ボケてきたよなあ。

「毛があつたら可愛い、か？」

「そう？」

何でもリー君に結びつけるのは止めた方がいいと思うなあ。

それに、あれは毛がない方が可愛い？　かつこいいになるのかな。いいと思うんだけどねー。

とりあえず拾って、教室に持ってきてみた庭のソレ。

ソレを興味深げに、マナが観察するようにジイっと見ていた。

「ナオさん」

「ん？ なーにー」

言いたい事はわかるけど、俺もこれに関しては庭に落ちてただけだから。ただ、はるちゃんに見せたら喜ぶかなっていう程度。

そんな俺の考えがわかったのか、マナは俺に問う事はせずにソレに向かって口を開いた。どうやら、知性があると判断したらしい。

「私は真那佳と申します。貴方のお名前は？」

につこりと微笑みながら、優雅に尋ねる。風が吹けば折れてしまいそうな程儚い笑みなのに、何故か俺には嵐が来ても傷一つつかない頑丈な鋼鉄の笑みに見えてしまう。

庭のソレも俺と同じなのか、一瞬不思議そうに首を傾げながら、素直に口を開いた。どうやら、マナは逆らってはいけない存在だと判断したらしい。賢明だよ、とは言わない。流石に俺もマナの機嫌を損ねるのは本意じゃないしね！。

ヒコはヒコで、マナとソレの会話を聞き漏らすまいと集中してるし。

あれって、はるちゃんに危害を加えそうかどうかを判断してるんだよね。俺も人の事は言えないけど、過保護だよね。

『…我は、龍じゃ』

「「「……………」」」

多少小ぶりというか、手の平サイズだけど、見たまんまだよね。俺たちの視線に気づいたのか、龍が居心地悪そうに身を振りながら、慌てたように言葉を続ける。

『我の本来の姿はこのような小ぶりなものではないのじゃ！』

「ふふ。では、何故手の平サイズになったのかしら？」

間髪入れずにマナが尋ねる。

本当のサイズはもつと大きいって事は……まあ、俺たちならいけるか。

『うう……』

龍が答えにくそうに言葉を詰まらせたけど、そこで引くマナでもないし、俺たちでもないよね。

「何故、ですか？」

笑みを濃くするマナに、寒気が背筋を走り抜けた。傍で見ている俺でもこれだから、直接向けられた龍にとってみたら恐怖を感じるかもしれない。

『ううう』

案の定既に半泣き。

小さな生き物が好きなヒコは、そろそろ救出しようか悩んでいるみたいだけど、もうちょっと待ってよとばかりに右腕を軽く動かし、ヒコを牽制しておく。

「…わかった」

俺の意図に気づいたのか、ヒコが頷く。龍が盛大に泣き出したら動くだろうけど、とりあえずは待ってくれるらしい。

『我は…大切なものを無くしたのじゃ。あれがなければ、我は元の姿には戻れんのじゃ』

「ああ。龍の宝玉というものですね。あらら。見た目通りどじっ子さんですね」

『うつ』

マナの言葉に盛大にダメージを負った龍は、机の上に丸まりながら泣き出した。こうして見るとヒコじゃないけど、可愛いよね。小さな感じがいいのかな。

「宝玉を無くしたのか……マナ、どれぐらいで見つけられる？」

泣いている龍を横目に、ヒコがマナに尋ねる。

探索系なら俺たちよりマナだよー。ヒコの言葉に、泣いていた龍の瞳が一瞬で輝くけど、マナは考えるように頬に手をあてて首を傾げた。それにまたへこむ龍。

「……マナ」

へこむ龍の姿が気に入ったのか、マナはあえて焦らしているみたいだけど、ちょっと可哀想かな。哀愁漂う背中が何とも言えないっていうか。

俺とヒコの後押しもあってか、マナは困ったように笑みを浮かべた。

「霽がかかった様になっていて見つけにくいですわね。少し時間をいただいても良いでしょうか？」

「へえ……」

マナにしては珍しい。

そう思ったら、自然と声が漏れてた。

「おそらく、本来ならばもう見つかってるんですけど、所々に同じような気配のものがあって、真偽を確かめるのに時間がかかりそう、と言えはいいのかしら？」

「…同じようなもの？」

「ええ。散らばった、と表現してもいいと思いますわねえ」

『……』

マナの言葉に思い当たった事があったのか、龍は無言のまま俺た

ちを見上げてきた。

『我に心当たりがある。地球ではお目にかかれぬような濃い気配を感じここまで来たが、ここに敷地内に入った瞬間弾かれたような気がしたのじゃ。』

その時、散らばったような感覚が突き抜けていったんじゃが、多分力の破片が世界中に飛び散ったのかもしれない』

「「「……」」」

龍の言葉に、今度は俺たちが無言になった。

心当たりっていうかさー。それって、誰かが張ってみた結界に引っかかったんだよねー。多分っていうか絶対にさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0236t/>

地味な女の子の勇者騒動

2011年10月14日02時34分発行